
魔力世界の時操者

逆様夜見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力世界の時操者

【Nコード】

N7863W

【作者名】

逆様夜見

【あらすじ】

——魔力、魔法、魔術、魔道。

この世界にはそれらのものが存在していた。

そんな中魔力を有するものの魔法が使えない者がいた。

しかしその者だけが持つ異能いのちを授かっていた。

その世界で異能はどれだけ特殊なのか。

その世界で異能はどんな役割を果たすのか。

今回が初作品となります。遅筆な上拙作ですが、気に入っていただ

ければ幸いです。

第00話 プロローグ

——魔法、それは神にあらがう力

——人間はその力を持ったとき、一族の安寧の為だけに使おうと決めていた。

——しかし現代、魔法は世界の常識として蔓延っていた。

——これはそんな世界の、神に神に匹敵する力を持った人間の中でも「王」と呼ばれる者の物語である。

「我が君、刻季様^{とき}。お願いしたいことがあります」

学園のトップであるところの生徒会長である天原華音^{あまはらかのん}が、羽間刻季^{はざまとき}の元に来るなり恭しく頭を下げて言った。

「せっかくのプロローグなのにな……」

刻季は訳の分らないことを呟くと視線に気づいて周りを見渡した。1-Cの教室中の生徒という生徒がこちらを見ていた。いや、教室の外にも集まっているようだった。

その視線の原因はわかっている。

もちろん華音だ。

魔法の専門学園、魔術優遇第三区空明ヶ崎学園^{まじゅうゆうぐうだいさんくからあけがさきがくえん}の生徒会長

魔術師としても強力と有名。

頭脳明晰、家柄も良し。

その上とても、とてつもなく美人なのだ。

大きく澄んでいる目や高く整った鼻、ぷるんとしている柔らかそうな唇を持ち、それらを包み込むように絹のような長い髪が神々しいばかりに輝きを放ち、その身長が高く、揺れるような胸にくびれた腰もまた魅力的すぎる。

そんな完璧な淑女を地でいく彼女の視線の先には、
ただの一年生にしか見えない少年。

顔は整っているものの、長い髪を結び、それに覆われていて影が残り少し根暗な印象に見受けられる。

魔法に関しては入学して程なくなのでまだ分からないものの、クラスでも特に異彩を放っているわけでもなさそうだ。

名前も知らず。

うすいじん 碓氷仁吾と南雲萌葱なぐももえぎの友人としか知らない。

そんな少年。

そんな特筆すべきところのない目立たない少年。

現状ではかなり名前負けしてる刻季ときは誰に聞かせるでもなく、しいて言えば空の先にいるであろう神に向かい問いかけた。

「なんでこんなことになったんだろう……」

それほど注目されることの慣れていない刻季が注目されることになった原因を思い出そうと思案し始めた。

思い出すには昨日まで時間を戻さなければいけないな。

そんな言葉もひとりごちた。

第00話 プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからも随時更新するので、チェックしてくれたら感激です。

第01話 優遇学園（前書き）

一話目は概要的な感じで短めになっています。

第01話 優遇学園

入学してまだ10日ぐらいなのに寮から学校までの道を慣れ親しんだ道のように中学校からの友人である碓氷仁吾と羽間刻季は歩いていた。

仁吾は数少ない同じ中学校からの新入生だった。

彼と初めて話した日もちょうど三年前のこれくらいの日だったと思う。

そんなことを思っただけで横目で彼を見るとちょうど目が合い、二カツと笑いかけてくる。綺麗な白い歯だ。

仁吾は筋肉質で野獣のようなカッコよさを持っている。

それも某映画のキスをして王子様に戻る野獣のような生ぬるいものではなく、本物の獅子のような獣臭さ、男臭さを兼ね備えているような存在。

そしてその上彼の実家は魔術師一家としても有名だ。

背はそれほど小さくないが、痩せ型の刻季が仁吾と仲良くなったばかりの頃は周りの人から虐められていると誤解されていた。

その誤解も、刻季と仁吾の仲の良さを知るとすぐさま立ち消えになったようだ。

「いや、それにしても同じクラスになれてよかったな。これで中高含めて4年連続で同じクラスだよ。やっぱり入学したてはそれなりに不安だから慣れ親しんだやつがいると助かるぞ」

笑いかけたまま仁吾はそう言った。

「ホントだよ。普通の学校でもそうなのにウチは特殊だからね…」

「ホントホント！特殊過ぎるっての」

仁吾は大げさに肩をすくめた。

同じ中学校からは刻季・仁吾を含め3人が魔術（魔術）優遇第三区ゆうぐだいさんく空明ヶ崎学園に通っている。

この学園は日本に6校しかない魔術優遇学園だ。

魔術優遇学園とはその名の通り魔術を優遇している学園だ。

古来より宗教徒と魔術師の間で抗争があった。しかし50年ほど前に抗争が収まり同盟を組むまでに至った。

そこで宗教徒は宗教徒を、魔術師たちは魔術師を堂々と増やせる状況になり、こぞって若い人材を集めようとした。

元々どちらも子孫に受け継いでいたモノ（魔法や剣技）だったのを公開し、今ではそれらが蔓延り、各国の軍事よりも力を持った。

そこで国々も危機感を感じ、魔術学園及び教徒学園の設立、法改正、軍備増強をおこなった。

それにより宗教徒・魔術師・国家の3すくみの状態になった。

尤も現在は「国家」が一番力をもち他の2つの派閥を抑える形になっているが、単純な力で抑えるより取り込むことを考え作ったのが「魔術優遇学園」だ。要するに国家に属する最大の魔術育成学校ということだ。

もちろん「教徒優遇学園」もある。

優遇学園は優秀な生徒しか取らず、個人が望む望まないにかかわらず、優秀であれば国家からの依頼ということで入学させられる。一応受験枠もあるが、それも全体の2割程度だ。残りは推薦ということになる。

刻季自身は推薦枠に入ってしまった。それほど望んだものではなかった。

しかし推薦枠に入ってしまった以上、入学するほかに手立てがなかったので仕方なく入学した。

あと3年は仁吾達と通えるのであまり悪い話ではないのかもしれない、とポジティブに割り切って、今は通っている。

そうこうしている内に校舎に着いた。学生寮は学園内にあるのでそれなりに近い。

校舎の前で人だかりを見つけた。入学して10日程度だが入学式以降この人だかりを見ない日は無い。刻季はまたか、と思い人だかりの出来ている中心を見る。

案の定学園の生徒会役員だった。全員アイドルやモデルのような美少女やイケメンだ。

相当見栄えのする顔立ちや^{スタイル}体格をしている。

その中でもひと際輝いている人が見えた。

第02話 人ばかり（前書き）

前回のすぐ続きとなります。
会話がほとんどです。

第02話 人ばかり

その中でもひと際輝いている人が見えた。

——あまはら かのん
天原華音生徒会長。

彼女が放つオーラのようなものは神々しいばかりに光って見えた。それに彼女の周りには心なしか集まる人数が多い気がする。

実際、中には本気で告白している人も見える。

噂では年間の告白回数が1年の日数では追いつけないそうだし、さすがにそのようなことは噂の域を出ないだろうが、しかしその噂が流れる気持ちもわかる気がした。

そして、魔術の名家に生まれ、学園内でもかなりの有力な実力者らしい。

それもそうだろう。

天原家と言えば数百年の歴史を誇る、日本の数ある魔術連盟のまとめ役である12師団トゥエルフスの一角である。

12師団はそれこそ世界中に魔術が広がる以前から存在し、宗教徒しゅうきょうととの戦争に控え結成した連盟で日本の魔術歴史とは切り離せないと言われるほど、長い間日本の魔術界の頂に結成以来君臨し続けている。

勿論12家とも有名すぎるくらいなのだが、天原家は12師団1stトップである、50年に一度決められる主席に幾度となく選ばれていることから一番高名な家。

そんな名家中の名家のお嬢様である。

そして伝統こそないが、魔術優遇学園の生徒会長である。

その上とんでもなく美人だ。

もともと綺麗な原石を磨きに磨きあげて作った宝石のような練成された美しさが彼女にはある。

高校生にしてすでに、完成形のような存在だ。

刻季は真横にいる仁吾に目をやると、天原会長を見ていた。

確かに綺麗だよなあとあんまり興味なさげに欠伸をしながら

「仁吾なら会長とでも会える機会多いんじゃないの？」

仁吾の家柄も良い。

「そうだな。でも特別仲良いってわけでもないし、まず家格が違うからな。あつちが魔術派閥だったのに対しこつちは国家派閥に属していたわけだ。まったく別物なんだよ。ただ同じように魔術を使っていたってこと以外はな。最近は家同士がそれなりに仲良いみたいだからパーティーに誘われたりするけどな」

「ふーん、羨ましい限りだね」

まるで羨ましそうに言わない刻季。

その態度に大笑いする仁吾。

仁吾は笑ったまま高い身長を生かし人ごみを見下ろし

「それにしても本当にいつもいつでもすごい人気だよな」

「生徒会に入る条件でルックスって項目でもあるのかな」

刻季が軽く皮肉を込めた冗談を言った。

「あるんじゃないのか？ 南雲も生徒会に入ったようだしな」

と今はここにいない刻季の友人にして幼馴染の名前が出てくる。

「……確かに、萌葱が入ったとなるとその条件の信憑性がすごく高くなるよ」

「あいつもものすごい美人だろ。そんなでもって現生徒会役員はみんなイケメンや美人ばかりだ。なんか疑う要素すら見つからないんだが……」

仁吾が改めて人だかりの中を見ると、ため息をもらした。

「あれで全員魔術の実力者だろ？」

「まあ優遇学園の生徒会に入るくらいだから相当なものだと思う」

「実力にルックスかあ……。何か足りないモノあるのかな？ ねーよな」

仁吾が軽く自問自答する。

そして思いついたかのように

「そういや、実力にルックスならお前も相当なもんだけだな」

「はあ？ 何を言ってるの？ こんな根暗そうに見える奴のドコがルックスいいのさ」

「その長い髪を切ったら大層男前な顔が出てくることだろうよ」

「仁吾に言われると皮肉にしか聞こえないんだけど……」

「ふーん……。まあお前がそう言うならいいけどな」

「それをいうなら仁吾が生徒会に入っちゃいなよ」

「俺には無理だよ。事務仕事とかもありそうだし」

「無理そうな理由ってそれ！？」

「お前のが生徒会には合ってるって、融通も利くし人との調和が得意だろ？ それに実力だって相当な――」

「魔術も使えないのにな？」

仁吾の言葉は刻季の柔らかい声音に遮られた。

「魔術も使えないのに、魔術優遇学園に入っちゃってこれからどうしようって感じだよ」

「……」

「魔力所有値だけが高くても魔術が使えないんじゃないじゃ宝の持ち腐れだなあ」

「実力つてのは魔術だけの話じゃないだろ。しかも持ち腐れているわけではないじゃないか」

「だけどね」

一言一言区切るように、大切な我が子に諭すように

「魔力っていうのはね、魔法に使うものなんだよ。それ以外に使うようなら魔術師でも魔法使いでもないんだ。」

「……」

「僕は魔法使いになりたかったよ。戦いの実力は二の次でいいからさ」

「まあお前の気持ちもわかるけどよ……、そこまで言うなら一回くらい俺に勝たせてくれてもいいんじゃないのか？」

苦笑して言う仁吾に刻季は

「仁吾は強いよ。本当に強い。学校でも有数の強さじゃないのかな？でも僕の能力は少しだけ異常だからさ。それに手加減したら君怒るじゃないか」

「当たり前だろ。真剣勝負に手加減なんて恥さらしも良いとこだ。」

「今の戦績は？」

「うつ……、156敗だ。次こそ勝つぞ！」

「めげずに向かってきてくれるのは仁吾と萌葱だけだから嬉しいよ。しかし魔力使わないリアルファイトならたぶんボコボコにされてるね……」

「そんなの魔力世界じゃ有り得ない戦い方だろ。それで勝っても嬉しくないし面白くもない。」

敗績を着実に伸ばしているのに何故か仁吾は自慢げに胸を張った。

「まあ実際、仁吾と戦うと恐怖する面もあるよ。すごい鬼気迫る感じで近づいてくるからね。」

「そうか？ 別段意識してやってるわけではないが……」

「なんかいつも怨念籠っているな。『勝つぞお…、勝つぞお…』って声が聞こえてくる気すらしてくるよ」

「俺はどれだけ飢えてるんだあ！」

仁吾は自分の勝利への執念に一抹を不安を抱く。

しかしケロつと手のひらを返し

「でもそっちのが少しでも勝率が上がるからいいか」

「そんなに勝ちたいのか……」

「おうよ！ 俺の中学時代からの目標だ！」

「それはありがたいね。まあ頑張つて勝つてよ」

仁吾の目標と言言葉に照れくさくなりながらも素直に嬉しそうだった。

そろそろ教室に向かおうと思い、最後に刻季は人ごみを見ると、またまなのだろうか華音と目が合った。

華音はにつこりと微笑みかけながらも、何故か意味深な視線を送ってきた。

（なんなのだろう）

何かと不思議に思っていると隣で仁吾が刻季の肩を掴んでいた。

「そろそろ行こうぜ。遅れちまうよ」

「うん、そうだね。急ごうか」

仁吾に急かされてすっかりと意味深な視線を忘れる刻季。
この視線の意味がわかるのがもう少し後である。

第02話 人ばかり（後書き）

会話が多くてすいません。

わかりにくいことがいっぱいあるとおもいます。

刻季の能力と仁吾の実家に関してはもう少しお待ちを…

仁吾の方は期待してもしようがないことかもしれません（笑）

刻季の方は…まあすぐに出すつもりです。

それから師団の話で数百年前の日本に英語はないよ、というのはわかってますが現代でそう呼ばれているということだと解釈してください。

第03話 幼馴染

教室には半数程度の生徒がいた。この教室は1-Cだ。

Cクラスだからといって魔術強弱とか魔力量とかそんなことは関係ない。

1年次は関東甲信越かんとうこうしんえつを7つの地区に分けて、その地区ごとにクラスが形成される。

刻季ときや仁吾じんご、それに加えて萌葱もえぎはもちろんC地区に該当する住所を持っている。

そして2年次に入ると成績や能力によってクラスが決められる。

2-Aと2-Cクラスは実力の高い者たちが集まる。

そして少しレベルは落ちるがDとGに配属されることになる。

そうはいつでも下位クラスが弱いということでは決していない。

基本的に優遇学園の生徒は魔術のエリートや家柄がいい人が多い。

というかそれらがほとんどだ。

だから差異が大きくあるわけではないのだが、それでも多少は差があるため生徒会執行部役員・風紀委員会委員なども大抵はAとCクラス所属である。

学園内の魔術での争いが頻繁に起こるので生徒会役員や風紀委員は学園秩序の維持のために、魔術を使って治める。

生徒会や風紀委員は魔術によほど長けてないと学園の警備などがないので仕方ないだろう。

刻季と仁吾が教室に入ると、入学してすぐ早速生徒会に抜擢された幼馴染がこちらに寄ってきた。

中学校も一緒の3人の内の1人だ。

まあ刻季にとって彼女は中学だけでなく産まれたときから一緒に育ってきた存在なのだ。

その寄ってきた幼馴染の南雲^{なぐも}萌葱は気まずそうに顔を顰めた。

「おはよう、刻季。今日は少し遅くなっちゃって、朝の集まりに間に合わなかったよ……。」

「おはよ、萌葱。生徒会入ったばかりなのにそんなんでいいの？」

「お父様にバレたら大変なことになっちゃう……。」

青ざめながら助けを求めてくるようである。

そういえば朝、あの生徒会の集まりに萌葱がいなかったなと思い至った。

萌葱は新入生の中で抜群の人気を誇っており、早速上級生から交際を申し込まれたとの話を昨日聞いた。それもそのはず、彼女は少し赤みがかったポニーテールと大きくて少し切れ長で澄んだ緑色の瞳がとても綺麗で、顔立ちも整っている。身長も女性の平均身長以上あるスタイルも良い。これで人気が出ないわけがない。

そしてご多聞に漏れず12師団^{トゥエルフス}の一角だ。

現在は12師団^{セカンド}の次席の位置に家長である萌葱の父親が付いている。萌葱がビビっているが本人の名誉のために断っておくと、萌葱の父親は優しい。

ただ少しばかり厳しいときがあるのだ。

刻季もそれほど怒られたことはない。

ただ娘ともなると色々あるのだろう……。

その次席の家の長女である萌葱はただのアイドル集団ではない生徒会に入学前からスカウトを受けていて現在所属しているのだ。

つい数日前まで風紀委員と生徒会が彼女を取り合っていると萌葱はげんなりとしながら言っていた。

それほど魔術に長けていて魔力が高いのだ。

その萌葱が、

「刻季、少し話があるんだけど……」

少し言いづらそうな彼女を訝しい目で見ながら言ってくるので、不審に思いながらも、なにかな？と刻季は言った。

「ウチの生徒会長わかる？」

「わからない人なんてこの学園にいないんじゃないかな」

「そ、そうよね。その会長が……」

「うん、会長が？」

彼女はすごい勢いでもっている

「あ、あたしは無理だと思っつて言ったのよ！ でもどうしてもと頼まれて……」

「だからなんなの？」

苛立ちをあまり隠さずに刻季が言う。

そして萌葱は刻季の目を見て決心したかのように姿勢を正した。

「……生徒会に入ってくれないかな？」

「……え！？」

刻季は整った顔が驚きで色を失わせる。

「……な、何言ってるんだ？」

「だーかーらー！ 生徒会に入ってほしいのっ」

「スカウト？正気か？」

「別に正気よ！ でも生徒会長直々に何度も頼まれて断れなくて……」

「なんで僕なの？ もっと優秀なのは周りにいっぱいいるよ。しかも僕は魔術が使えない。萌葱にスカウトが行ったのは納得だが僕に来るのは納得できないよ」

そう、刻季は魔術が使えない。
それも全く。

それでも入学出来たのは、魔力所有値の高さによるものだ。

魔力所有値が高いからといって必ず魔術が使えるとは限らない。

その逆で、魔法の使用には必ず魔力を必要とするが、適正のない刻季は、魔術が使えない。

それでも魔力所有値だけは人より数倍高い。

『魔術優遇学園』や『教徒優遇学園』は大抵魔力所有値や魔力量、魔法・魔術適正で入学が決まる。

刻季は適正のマイナスを帳消しに出来るくらい魔力所有値が高い。
ゆえに入学依頼―（依頼という名だが強制的だ）がきた。

それでも事情を知ってる萌葱は、

「あんたは別に魔術なんか必要としないくらいじゃない。あたしよりも強いくせに……」

「バカ言つなよ。魔術が使えないのに」

「バカはあんたよ！ あたしに碓氷にもまるで負けたことないくせに。ねえ、そろそろ隠すのをやめない？」

おそろおそろといった感じで聞いてくる

「やだよ」

一喝した。

「能力を見せると群がる奴等がいる。そういう奴等を萌葱も見てきただろ」

「でも生徒会は信用できる人ばかりだよ。まだほんの少しの付き合いだけでそれだけはわかる」

萌葱の人を見る眼はすごく長けていると、長い付き合いなので知っ

ている。

その彼女が言うからには、本当に信用できる人ばかりなのだろう。しかし、

「生徒会内で能力を使うのはお前が言うとおり信用できるなら良いと思うけど、他の場合どうするんだよ。」

萌葱は気づいたみたいに手をポンつとのせた。

「あつ！ そつか…。」

「生徒会の仕事ってそーゆー仕事ばかりだろ。僕は能力を使わない以上役に立たないよ。生徒会長には断っておいてくれ。」

「でもでも、あたし個人としても入ってほしいんだよー！ まだ一年私だけだし、これから入る予定もなさそうだし、寂しいの……。ねっ刻季！ 助けると思って。」

目を潤ませて言う萌葱。

それにしてもこう言われると辛い。

萌葱自身あまりわがままを言わないからだ。

本当に寂しいのだろう。

しかし刻季は断ち切るように、

「悪いけど今回は力になれないよ。まあ暇な時ならいつでも遊びでもなんでも付き合うから諦めてくれ。」

必死の懇願を諭すように言う。

「そうかあ……。」

萌葱は案の定悲しそうにうなだれる。

そうした原因は刻季だが、こつも悲しそうな顔をされると何とかしたくなる。

どうすべきかと悩んでいる刻季。

その時は萌葱は何か思いついたみたいに、あつ、と小さく声を上げ

た。

すると突然、演技じみた悲しそうな表情を浮かべた。品行方正な彼女にはあまり似つかわしくないことをしている。

刻季はなにかと戸惑っていると、彼女は大げさに、そして可哀想になるほど強いため息をついた。

「わかったあ……、でも一応直接会って断ってくれる？ あたしの友達が礼儀知らずだなんて思われたくないから」

「うーん、まあ、それもそうかもね……。そうすることにするよ」

「じゃあ今日の放課後開けといて。一緒に生徒会室行こう！」いきなり声を張る萌葱に刻季は吃驚していた。

「わ、わかった。わざわざ悪いな。」

「いいよ、それぐらい。じゃあ後でね。」

そう言っただけで彼女はごきげんで自分の席に戻って行った。

話のどこかに喜ぶことがあったのだろうか。

稀によくわかんない萌葱。

しかしそれでも刻季は萌葱の機嫌がよかったのでなんとなく嬉しくなっただけの戸惑いを忘れていた。

もう少し考えて行動すべきだったのだ。

これを明日にはもうすでに後悔していることになる。

魔法学を混ぜた授業が終わって放課後、仁吾が来た。

「おい刻季。帰ろうぜ。」

いつものように刻季も返事をしようとしたところ、

「ダメダメ！ 刻季は用事があるの！」

その会話を耳聴く聞いていた萌葱が刻季の腕を胸に引き寄せた。忘れていたところだった。

「用事？　なんだよそれ」

仁吾が萌葱に向かって聞く。

「あんたには関係ないでしょ！　ほら行くよ！刻季」

「あ、ああ……」

萌葱が腕を引つ張つて歩き出す。

仁吾に向かって手を顔の前でかざし、「悪いね」のポーズを取った。彼は何か何だかわからないみたいに首を傾げている。

教室を出ると萌葱は憤慨する

「まったく、約束もう忘れたの？　放課後って言つたじゃないの！」

「まあ軽く忘れてたけど、仁吾に説明してからでもいいんじゃないの？」

「そんなの必要ない！」

わき目もふらずに生徒会に急ごうとする。

「他の生徒会役員はもう集まってると思うよ。」

「……え？　まだHR終わって数分しか経ってないぞ。あり得ないでしょ」

「ウチの生徒会に今日刻季が来ること知っているからたぶん全員集まっているわよ」

「うわっ！　全員いる前でとか断りづらいにも程があるな……」

「それでもこういうことはしっかりと本人から断らないとね」

「それはそうだけどさ……。まさか萌葱が全員呼んだの？」

「そんなこと新米に出来るわけじゃないじゃん。でも会長に呼んだ方がいい、とは伝えただけ……」

「やはり元凶はお前か……！」

刻季が憤慨して声を張った

「それぐらいいいでしょ。せつかくの誘いを断るんだから少し罰を与えないと」

「どんな思考の持ち主だ！ 余計なことをしないでください……」
「あたしだって全員いる前で迫られたんだから刻季にも味わわせようと思って」

「萌葱のことなのになんで僕まで……。何とかならないか？」

その後なんとか回避しようと努力するが、

「ならない。」

の言葉で一蹴された。

刻季は諦めてしっかり断ろうと思いなおした。

そうこうしている内に生徒会室の前まで着いた。ドアは少し厳格そうなのを見せかけている。

不安になっているのがわかったのか萌葱は、

「大丈夫大丈夫。慣れるから」

「慣れるつもりはない！」

危なく断る道すら断とうとしてくる。

刻季は深呼吸すると決心してドアを開けた。

第03話 幼馴染（後書き）

色々ストックも書いていたのですが、結局始めから書いています。

第04話 生徒会室（前書き）

相も変わらず拙い分ですみません…

しかし読んでもらえて幸せです。

感想いただけるともっと幸せです。

それにしても新キャラを空気にしないか心配です。

第04話 生徒会室

刻季は深呼吸すると決心してドアを開けた。

そこは、ここ学校なのか？と思うぐらい荘厳な部屋だった。

アンティーク調な雰囲気もありつつ荘厳さも失われていない。

そして部屋の中の楕円形テーブルを取り囲むように役員たちが集まっていた。

朝の集まりにいる人たちだ。

その中心にいるのが生徒会長一天川華音だった。

やはりとてつもなく美人だった。

彼女は一步前に出ると、

「3年生徒会長の天川華音です。羽間さん、これからよろしくお願い致します」

（——ん？何か聞き逃せない言葉が……）

そのあとその横にいる茶髪の高身長イケメンがにこやかに

「3年生徒会副会長の金城巽きんじょうたつみです。歓迎するよ」

（——うーん……。聞き間違いだろうか）

生徒会長の左隣りの眼鏡を掛けた青髪の美少女が

「3年生徒会書記の法等保美ほつらやすみです。新たな戦力として期待しています」

（——もう聞き間違えじゃ済まねえよ！）

その横の赤髪の活発そうな美少女が満面の笑みで

「2年生徒会会計の永峰柚穂ながみねゆすほだよ。仲良くしてね！」

（——あの…仲良くしない予定なのですが……）

その横の少し仁吾に似た雰囲気のがたいの良い男前の人がブスツとした顔をして睨みながら

「2年の鷹司幸継たかつかさゆきつぐだ。言つとくが俺は歓迎なんてしない。なんで會長もこんなヒョロそうな奴を……」

（——あ、やつとだいぶ理想の反応が……）

そう思っていると、一番遠くにいた柚穂が幸継のところに行くとガッンと殴った。

「ようじ、まだそんなこと言ってるの？　ほぼ満場一致で迎えるって可決したじゃない！」

「俺は歓迎しないって言いつけているぞ！　こんな奴が生徒会でやっていけるわけないだろ！　帰宅部が良いところだ。それとようじって呼ぶな！」

「じゃああんたなんかつまようじでいいわね！　彼は魔力も高いんだからやっていけるでしょ」

「誰がつまようじだ！！　魔力が高いからなんだってんだよ！」

お互いにフンツと顔をそむけた。なんか刻季を置いて喧嘩をしている。

その上いつのまにか入ることが確定しているみたいな展開になっている。

刻季が萌葱を睨むと、気まずそうに顔をそらした。

しかたなく前を向きとりあえず空気を変えようとした。

「あの……」

すると一斉にこちらを向き、そして生徒会長が

「ああ……、ごめんなさい。あなたたちもう止めなさい。鷹司君も、もう決まったことです。従ってください」

すると幸継も渋々と

「……はい」

と引き下がった。

しかし引き下がられても困る。

なにしろ刻季としては入る気がないのに勝手に話が完結している。ここらで断っておかないと大変になると思い

「あ、あのですね……。実に言いにくいことなのですが……」

また天原会長がこちらを向き直り

「はい、何でしょう？」

しつとり微笑みながらその美貌を見せてくる。

刻季が言葉に詰っていると、

「諦めて入ったら？」

萌葱がボソッと、それでもハッキリ聞こえるように言ってくる。

「バカ言わないでよ」

刻季も萌葱にだけ聞こえるようにそう言った。

そして今度こそはつきり断ろうと声を絞り出した。

「あの……、僕生徒会に入る気ないんですけど」

その瞬間、刻季・萌葱を除く全員が息を止めた。

萌葱はこれ見よがしにため息をついている。

そして少ししてから天原会長がみんなの意見を代表するように

「……入らないのですか？」

「ええ、こちらには断るつもりで来ました」

「でも南雲さんは……」

「萌葱が何を仰ったのかわかりませんが、この話はお断りさせていただきます。」

その言葉に天原会長は少し何かを考えるようにして

「何故入らないのですか？ 確かに危険の多い職ですが、卒業後の待遇はかなりよろしいですよ。OBの方々も優しい方ばかりですし、今の役員の皆様も優しいですよ？」

「はあ……、まあ魅力的なお誘いなのですが……」
そこで言葉を切った。

ホントに魅力的な誘いだった。

卒業後のことをまったく考えていない刻季にとってこういう誘いは正直言っておりがたい。

しかし、

「僕魔術が使えませんので……」

そうなのだ。

こればかりは仕方ない。

みんながまた驚いた。それもそうだろう。

大抵魔術師は魔力量で勝負が決するからだ。

魔力が多ければ、魔術が使える、それが当たり前の世の中になりつつある。

だが俺は使えない。

会長が絶句から復帰したように声を出した。

「本当なのですか？」

「ホントです。魔力所有値は高いんですけど、魔術は全く使えません」

「ですが……」

「お気持ちはわかります、ですが事実なんです。僕の魔力は無用の長物なんです。な、萌葱」

萌葱は悔しそうにした後、こくんと頷いた。

締めにかかるうと刻季は口を開いた。

「そういうわけで申し訳ありませんが……」

その言葉はそこで切られた。

幸継がいきなり大きくふんぞり返りながら偉そうに腰に手を当て嘲笑するようにいった。

「やつぱりそうだ！ 俺は使えない奴だと思ってたんだよ。こんなヒョロくって体力もなさそうなら、極めつけは魔術が使えないときだ。お前もう学園をやめたらどうだ？」

それなりに温厚な刻季もさすがにいらついた。

事実なのだがやはりこのような手合いは表面的には慣れなくても深層では拒絶している。

思い切り睨みつけてやると、鼻で笑うようにした。

「なんか文句があるなら言えよ。言いたくても怖くて言えないか？」

ハッ！ とんだ臆病モンだな」

中傷の眼差しを向けている。

限界が近づいてきたので一歩前に出ようとすると、萌葱が刻季の裾を掴んだ。

不安そうな表情をしている。

刻季は軽く、——幸継に対する眼つきの1/1000くらいの眼差しで睨む。

（萌葱がつれてきたんだぞ、止める権利があるの？）と非難も込めてそれでも面持ちはそのままに裾を離そうとせず首を振る。

その行動にすこし頭が冷えた。

刻季は萌葱がどこか懇願するような目をしていることに気付いた。そういえば、と思い至った。

萌葱は今現在生徒会に所属している。

ここで刻季が暴れば、それは自分自身はすっきりするかもしれないが、萌葱としては長い間付き合っていかなければいけないのだ。一時的な興奮に身を任せてはダメだ、そう熱くなっている自分に言い聞かせる

そもそもこの幼馴染はあまり刻季に対して嫌になるような事や不利益になるようなことはしない。

こちらがいくら迷惑をかけても取り締まり、解決すると微塵も悔恨を残さずにいつも通り優しく接するのだ。

刻季は仕方ないとばかりにため息をついて萌葱だけに見えるように微笑む。

萌葱は少し顔を赤くし照れながら、ありがとうと彼女がいつも合図にしているウィンクをしてくる。

安心してとても魅力的な表情を向けてくる。

その表情に刻季は更に相好を崩した。

「おいおい、ウチの新しいのに慰めてもらってしあわせか？」

一部始終見ていた幸継の言葉にその雰囲気をぶち壊しにされる。

せっかく丸く収めようとしたところに新たな爆弾を投げ込むみたい

に。

刻季が萌葱に迷惑がかけられない程度の非難をしようとする

と華音が

たしなめるように

「やめてください。この学園生徒会役員ともあろう方が誹謗中傷をするなど言語道断です。本当に申し訳ございません、羽間さん」
自分の立場を取られた立場の刻季なので

「あ、いえ。大丈夫です。確かに言うとおり魔術使えないでしょうもない奴ですので」

と、何故か更に自分を卑下する様な言葉になってしまいが言った。
そして会長は首を振った。

「そんなことはありません。そしてやはりあなたの魔力は私たちに
とって魅力的です。」

「え？」

「魔力にはいろいろな使い道があります。自ら魔法に変えて使うこと。普段私達が行っていることです。それから魔力を物体に込めて魔力を有したモノに変えること。たとえば、宗教徒が使う剣術や他には魔術書なんかがそうです。そして魔力を他者に授与することです。羽間さんはこちらができるのではないのでしょうか？」

「はあ……。まあ出来なくもないですが……」

「それでは改めてお願い致します。」

会長が恭しく頭を下げた。

刻季はあわてて

「ですが、そのようなことだけで所属させてもらうのは申し訳ないですよ。皆さんが体をはるのに、俺だけのうのと魔力の譲渡だけだなんて」

すると幸継が

「そうだぞ！ そんな楽な仕事でいいなら猿でもできる」

そして柚穂が

「だからやめなさいって会長も言ってるでしょ！ それをいうならあんたの学習能力も猿並みよ」

「うるせえな！誰が猿並みだよ。ホントのこと言ってなにが悪いんだ」

「いいから黙ってなさい！」

また頭を思いつきり殴る。幸継は痛みにも悶えて黙る。今度は柚穂も魔術を使って殴ったようだ。

すると横目でそれを見ていた巽が口を開いた。

「幸継君が言ってるのは気にしないででもいいからさ」

そして保美も

「私達はホントに歓迎しています。是非お願いします。」

そんなこと言われては断りにくくなるとばかりに縮こまる刻季。仕事は魔力だけでいいなら、それほど楽なことは無い。

しかし万が一にも公で能力を使つては面倒どころではない。

そう誘惑を断つように

「いえ、ホントに申し訳ありませんから。お断りします。」
出来る限り丁寧に頭を下げ断る。

「全く考え直す気、ありませんか？」

会長が最後の打診とばかりに語りかける。

「すいません、せつかくのお誘いですが」

社交辞令的な断り方をする。

そして会長はいきなり剣呑を変えたかのようにして、

「それでは、生徒会権限を使用させていただきます。」

「ちよつ！それは……」

「自発的に入つてくだらないのでは仕方ありません。それでは羽間さん。あなたはこれから生徒会役員です。いいですね」

強引に話を進めようとしてくる。
なかなかうまくい交渉術？

……強制術だ。

「え！？ ちょっと待ってください！ ねえ、萌葱」

助けを求めて萌葱の方を刻季は見ると彼女も動揺している。
萌葱は当てにできない、と踏ん切りなんとかしようとする。

「生徒会長！ 少し待ってください」

「申し訳ありませんが、それは聞けません。生徒会権限を使用しましたから。」

生徒会権限とはそこまで強制力があるのだろうか？

最後の綱と思い質問した。

「それは全く取り消せないんですか？」

「可能と言えば可能ですが、不可能と言えば不可能です」

「どういうことですか？」

怪訝に思って聞く。

「権限の使用者と決闘して勝てば帳消しになります。決闘の結果はこの学園では絶対ですから」

会長が淡々と、そして有り得ないと思っっているような態度で言う。

——決闘をすれば帳消しにできる。

その言葉を聞いて助かったと刻季は思った。

決闘ならば能力を使っても見るのはここにいる役員だけだろう。

それに萌葱は信用出来ると言っていた。

外部に情報が洩れる心配も限りなく低いだろう。

そう頭の中で素早く計算し声高に

「天原生徒会長、決闘を申し込みます」

全員の息をのむ音が聞こえた。
少しの沈黙が流れる。

そしていち早く復帰した巽が、

「本気？ 会長ホントに強いよ」

「ええ、本気です。確かに強いでしょうね」

そして会長は

「ホントにいいのでしょうか？ 勝ったらすっかり入っていただきますよ」

その言葉に首を縦に振る。

萌葱がまた不安そうな顔を浮かべている。

刻季は安心させるように声を落とし

「やりすぎないようにするから大丈夫だよ。心配しないで」と優しく囁く。

それでも萌葱はまだ不安そうな表情が隠れない。

しかし他にはどうしようもないので萌葱を放っておき華音の方を見た。

華音は驚きから回復させて言った。

「決闘をお受けいたします」

彼女の声がアンティーク調な部屋に響いた。

第05話 能力（前書き）

読者様ありがとうございます。

それでは……

刻季いつきまーす！（笑）

第05話 能力

あれから役員達と空明ヶ崎学園第5体育館に来ていた。刻季は最初この学園の地図を見たとき驚愕した。

学園が東京都の約1/20を全て所有しているのだ。

その中に校舎や寮や医療機関、国道やモノレールの線路に空港、飲食店やショップやレジャースポット、そして政府や研究機関など。ここにはないものは、歴史的な建造物や海くらいのものだ。山はある。

学園都市、いや都市学園に近いのかもしれない。

ちなみに他の区の優遇学園はこの学園よりも規模が大きい。

学園生で庭付き3階建ての家なんてのがある人もいる。

古い名家の人たちは、その大抵の家が学園の一部を所有しているの
で寮住まいせず実家から通ったりもする。

萌葱もそのうちの一人だ。

空学は生徒数も尋常でなければ、日本規模の学校なのでここでなんでも済ませてしまえる。

その代わり極力学園外へ出ることは原則禁じられている。

そして彼らがいるここ第5体育館は学園が所持している12個の体育館の中の一つだ。

現在開いている体育館が第5の他に第11しか空いていなかったの
で、どちらかと言えば近い第5体育館へタクシーで来ていた。
近いと言っても20分程かかったが。

保美によると学園内の体育館は魔術の使用を想定して作られている
ので、壁や天井などは鋼鉄でできていてその上に詳しくはわからない
そうだが強力な耐久魔法・防護魔法がかけられているそうだ。

これほど対策をたてているにもかかわらずまれに修復が必要になることがあるらしい。

今回もそうなるのであろうか、と役員みんなは不安がっていた。会長はそれほどまでに強いのか、と刻季は不安になるところか楽しみになった。

別段戦いが好きなのではないが、強い人は単純に興味があると彼は言う。

タクシーの中で巽が必死になって説得していた。

こんなの入った後にやりにくくなるだけだ、魔術が使えないのにとうするつもりだ、等々。

もう巽の中で刻季が入ることは確定しているみたいだ。まだ戦う前なのに関わらず…。

失礼な、と刻季は少し思ったが言わないでおいた。

体育館の半ほどまで行くと、刻季は華音と向かい合う。

離れている役員たちの緊張感が伝わってくるが、華音は平然としている。

役員はきつと僕を心配しているんだろう、と刻季も気づいた。

萌葱も不安そうな面持ちを切らずに眺めている。

「二人ともいいですか？」

臨時審判の巽が確認する。

今二人の距離は決闘で一般的な初期距離の10m程度離れている。

「ええ、大丈夫です。羽間さん、よろしくお願い致します。」

離れている華音が優しい声音で言う。

決闘前なのに、仁吾とはえらい違いだ、と刻季は口元を緩ませる。

「こちらこそよろしく願います。」

俺は軽く頭を下げて応じる。

異は確認が終わると一回深呼吸をし、落ち着きはらった。

そして二人を交互に見ると

「始め！」

決闘が始まった。

「行きます！」

華音が動き出す。

遠隔的な攻撃魔術は使わず、強化魔術と加速魔術を使用してこちらへ一気に近づく。

自分が魔力を使用していないので消耗の早い攻撃魔術を使わず、手短で、安全で、魔力の消費も少なく済む打撃で終わらせようとしたのだろう、と刻季は理解した。

ものの一瞬で華音が右足、左足とたった2歩進むと二人の間にあった距離は半分ほどになる。

彼女は体の動き方できつと身体の硬化魔術も使っている、と悟っていた。

打撃だと勝負は決しやすいがカウンターに気をつけなければならぬ。

その華音は刻季の近く3m程に来ると、途端に動きが遅くなる。

まるで重たい何かを背負っているような動きだ。

それは錯覚ではないのだがそう比喻するのが一番しっくりきた。

先ほどより数段動きが鈍くなる。

何が起こったかわからない。わかってない。

あまりのことに反射的に刻季から距離を取るようになる。

華音はその時使用していた魔術、そして魔力が消えていることに気が付き、

そして驚愕した。

魔術を消滅できる魔術。

魔力を消散できる魔術。

そのような類の魔術は、現在この世界では存在が確認されていない。同じ威力の魔術同士をぶつけることによって似たようなことは可能だが、目の前にいる彼は魔術が使えないと言っていた。

そんな嘘をつくとも思えないうえ、魔術の使用動作もまるで確認できなかった。

しかし確かに華音の魔術は消えていた。使用した魔力ごと……

魔術自体昔からすると決して常識とは言いがたい。

だが目の前の彼に比べると、非常識の度合いに開きがありすぎた。

そう思うと、そう思い始めると、目の前の存在に恐怖する。

決闘をする決めてから、手を抜こうなど全く思っていなかった。確かに魔術が使えないとは聞いていたが、それでも決闘を申し込むからには何か他の手立てで勝利をとりに来ると思っていた。

だから彼に失礼のないように、入ってもらった後も争いが残らないように、気絶程度におさえるように、それでもしっかりと闘おうとした。

そんな気遣いを微塵も必要としていなかった。

目の前の少年は決闘が始まると、年相応の笑みを浮かべていた。つい先ほどの勧誘していた時の大人びた様子は残っていない。

本気で楽しんでいる。

生徒会長である華音を前にして……

この学園に今までそのような生徒が入ってきたことは無かった。少なくとも華音が入学してからはいなかった。

それどころか決闘の申し込みも数えるほどの生徒からしか来なかった。

この学園での一番の規格外、それが――空明ヶ崎学園生徒会長、天原花音だった。

それ以上の規格外――”それ以上”で片づけられない程の……それではおこがしいほどの――と今対峙しているのだと身体中が警告を発している。

しかし、その危機を眼前に晒しながら、驚愕しながらもそれを隠さず華音は笑みを浮かべる。

刻季はそれを見て、更に無邪気に笑った。

「羽間さん、私は少し……いえ大分あなたのことを侮っていたようです。申し訳ございません。そして……」

彼女は息を溜めるようにしながらも笑っていた。

今まで見た表情で一番愛らしい笑顔だ。

「本気を出させていただきます！」

きつと会長は力を抑えに抑えて戦っていたのだろう、と刻季は思った。

役員は驚いている。このヒョロそうな生徒に本気を出すということはどうなるか分かっているようだ。

その上魔術も使えない。

下手すれば死ぬこともあるだろうと当然のように役員は思っていた。幸継は早く終われ〜とわかりやすい顔をしていた。

萌葱は別の点で不安になっているようだ。
しかしやめられない。

強者との戦いを……。

——あくまで相対的な強者だ。

——絶対的な強者は自分だ。

——だから負けない。

「会長に本気を出していただき光栄です。だから……」

意地悪そうな笑みを浮かべ、

「この能力は内緒ですよ？」

能力をしっかりと使うことにする。

華音が動く。

先ほどに比べられない程、段違いの速さで近づく。近づいてくる。

刻季は能力の範囲を広げる。

華音が魔術の消滅と思っていた行為は似て非なるものだった。

実際には、魔術を強制解体し、魔力を吸収する。

相手の魔術を、魔力を自分のものにする。

そして自分で使う。

唯一自分で使える方法で……

華音は人間に出せる速度をとんでもなく超えて刻季の後ろを取る。

後ろから攻撃を加え一瞬で勝負を決しようとしている。

刻季はそれを見越していたような様子で、空気中にて浮遊している魔力（その場合、マナという）の吸収と華音の使用魔力の吸引を感じ、能力の使用条件が整ったことを把握した。

異能だ。

使う能力は魔法ではない。

異能だ。

能力を発動する。魔力の世界では散々忌み嫌われ、研究対象とされかけた、自分だけの能力。

僕だけのもの。

この能力は僕だけのものだ。

能力を発動させる。

途端に華音の動きが止まる。周りのみんなも止まっている。

もちろん驚いて止まっているのではない。

物理的に止まっている。

魔法の代わりに使える能力。

時を止める能力。

制限時間は今の自分の魔力の蓄積量だ。そう余裕はない。

相手はさすが会長だけあって魔法の使い方に無駄がない。

これは確かに本気だ。

予想より魔力の吸引が出来なかった。

しかしそれでもやることはやれる。

徐々に減っていく魔力に気付きながらも華音に近寄り拳を握る。

能力を解除しながらそのままそれを腹に叩き込む。

女性に対してなので優しめに、と一応言い訳はしておく。

ぐふつと衝撃で息を吐き、華音は膝をつく。苦しそうにせき込んでいる。

そして恐る恐る刻季の足元あった視線を上げる。

見上げる華音の眼には、鎮痛の思いと驚愕——何が起こったのかわからないといった思いが書いてあるようだった。美貌が揺らいでいる。

周りも萌葱以外は状況の把握をしていない。

男性陣に限っては口をあんぐりと開けていた。きっと華音は畏敬の対象だったのだろう。

数十秒時間が流れる。

誰も口を開こうとしない。

無言に堪えかねて俺は、「え、ええと……」と声をもらす。

まだ誰にも動きも返事もない。

「あの、だいじょうぶですか？」

その声によつと我に返ったかのように、眼に力が戻った華音は

「あ…、はい。心配いりません」

ようやく返事をした。

「い、一応僕の勝ちでいいですかね」

「はい。それは良いのですが、何が起こったのですか？」

言いにくいことをいきなり聞いてきた。刻季は視線をあちらこちらに逸らす。

そこで体に力が戻ったらしい華音は立ち上がり

「羽間さん、私は負けました。参りました。」

と深く頭を下げた。

役員みんながこちらに集まってきた。

みんなの視線が刻季に集まる。萌葱は彼を安心したような、しかしどこか非難するような目で見てくる。

甘んじて受けようとは思いながらも怖くて目を合わせられない。

「えーと、よくわかんないけど刻季君の勝ちってことなのかな……？」

巽が驚愕を隠さずに言った。

「ええ、たぶん……僕の勝ちだと思いますけど」

「それで、どうやって勝ったの？」

巽が疑問をぶつけてくる。他の役員も同じのようだ。

助けを求めて萌葱に目線をやると、怒ったように、フンつと無視をしてくれる。

要するに長い永い付き合い合いの幼馴染は助けてはくれないらしい。

この状況はもとはと言えば萌葱のせいじゃないのか……、疑問が湧いたが結局のところ自分のせいだ。

それだけのことをしてしまったのだから仕方がない。

その間も巽たちはこちらへ向ける疑問と困惑、興味をそらさない。

そこまで身長が低いわけではないが皆を上目づかいで見るような感じになっていく。

「あのですね……、これには事情がありました……」

「事情とは？」

「それは……色々な……」

「色々とは？」

「そ、それは……」

攻撃の手を緩めようとしなない役員達。

気を使うだけの余裕は華音が負けてなくなったらしい。

あまりにも問いかげに困った刻季が次に取った行動は
「し、失礼します！」

逃走だった。

それはもうボルトも吃驚の逃げ足だった。

「羽間さん!？」

「刻季!？」

二人のそろった驚く声が聞こえる。

「あの馬鹿……!」

ついでに罵倒も後ろで微かに聞こえた。

第05話 能力（後書き）

次回華音がデレる予定です（笑）

はやーとかの意見は勘弁してください。

出来る限り早く更新したいですが、少し遅れるかもしれません。

第06話 主人とメイド？（前書き）

長かった。

今回もきつと修正がいるでしょう。

気になることあったら何でもお聞きしてください。

第06話 主人とメイド？

その日の夜、寮の自室の隣の仁吾の部屋に来ていた。

「じゃあ、完全に南雲に騙されていたわけだ。ハッハッハ……！」

「笑い事じゃないよ……」

一通り説明した後に起こったのは、仁吾の爆笑だった。

「でも別に入ればよかったんじゃないのか？ 考えればおいしいことだらけだろ。卒業後の事もバッチリだし、あの生徒会長と一緒にいられるわけなんだし、なんで断ったんだ？」

「確かに良いことは多いよ。でも魔法が使えるわけじゃないしね。

そんなの申し訳ないから」

「それでもいいって話なんだろ？ 決闘してまで断らなくても……」

「でもそれだけ僕的能力が人に知られる。」

刻季は決然としたように言った。

そして仁吾は気づいたみたいに

「そういえばそうだな……。でもお前生徒会の面々で使ったんじゃないのか？」

「うっ……。けどそうするしかなかったし、萌葱は生徒会のみんなは信用できるって言ってたし……」

「南雲がそう言ってたならそうかもしれないけどな。できる限り気をつけるべきだろ。刻季はどこか問題を好む傾向があるからよ。」

「仁吾ほどじゃないよ……」

そうかな、と仁吾はポリポリと頭を？く。

「中学のときに問題を起こしてなぜか一緒に僕まで怒られていたのを忘れてないだろうな」

「まあ……過去は過去、だろ」

「そんな台詞で済まされるほど軽い問題ばつかじゃないでしょ……。
あの小学生のときはそれなりの温厚派で知られていた萌葱が規則と
かに厳しくなりだしたのは仁吾のせいだからな。本当に可愛いやつ
だったのに……」

純粹で無垢な子だったと刻季は記憶している。

「確かに俺が知ってるのは厳しい南雲だけだな。でも今でも可愛く
ないわけではないだろ」

「まあ……ね。容姿は抜群に可愛いよ。それこそ生徒会入っても良
いくらいにね」

「その点は刻季も劣ってないだろ」

「冗談やめてよ。別に冴えない奴でいいから……。それくらい自分
でわかつてる」

謙遜しているようには見えない。

「別に冗談じゃねえけどな。お前がそう言うなら良いよ。どうせモ
テても南雲のモンなんだし」

「萌葱とは別になんでもないただの幼馴染だよ」

「ふん」

仁吾は意味深な笑みを浮かべる。

「まあとにかく一件落着したのか？」

「萌葱がうまく言っといってくれれば……たぶん、あるいは、」

「どちらにせよ明日になればわかるか。どうせ朝はいつものがある
だろ」

「見ない日はないからあるんじゃないの？んじゃ部屋に戻るよ。お
やすみ」

「おう！おやすみ。明日が楽しみだな」

「変わってくれるか？」

「あの会長なら……構わない」

なんて軽口をたたきながら仁吾の部屋を出る。

相談のつもりで来たのだが相談にならなかった。
しかし気持ちはそれなりに晴れているようだった。
なんか愚痴を言いにきたみたいで情けない、と自嘲気味にそう思っ
て隣にある自室のドアを開ける。

まだ6時を回った程度だが、今日はいろいろあったからシャワーを
浴びて直ぐに布団に入ろうと意気込みながら……。

ドアの奥には何かいた。
いや何かでは失礼だろう。
華音がいた。
制服姿にエプロンをかけて。

顔には表情らしい表情がなかった。
今日は色々あった為、何かと思うことがあって彼女の顔に笑みは浮
かんでいたが、実際はクールな人なのかもしれない、と異常事態
に瀕して刻季は冷静に分析していた。

やっと我に返る。
だが我に返ったところで目の前の異常が変わるわけではない。

……なんだ？ 何が起こっているんだ？
何故僕の部屋に天原会長が？
ていうか何その格好！？ 若妻なのか！？ 若奥様なのか！？
、と刻季の頭の中に様々な疑問を駆け巡る。
思考が追いついていかない。

今日のことの疲れや華音に対する罪悪感に加え、目の前で起こって

いることのせいで混乱に拍車がかかる。

彼女は無表情ながらも確たる意志を持ってこう言った。

「おかえりなさいませ、羽間様」

・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

あまりのことに啞然とする刻季。

その様子にキョトンと小首を傾げながらもう一度

「おかえりなさいませ、羽間様」

聞こえてないと思っただけらしい。

二人しかいないこの空間で聞こえないなんてこと有り得ないのだが

……

「え、ええ……。ただいまかえりました……」

色々な疑問が生まれるなか、やっと出てきた言葉は何故か普通の返事だった。

「はい、おかえりなさいませ。ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも……」

そこで頬を赤らめて言う華音。

その表情は世界中の男を虜にすることができる力をきつと持っているだろう。

ホントになんなんだ!?

こんな表情をもらえるようなことを僕はしていないはずなのだが……

刻季の今日したこと

・生徒会に入ると思われていたのをあっけなく断った（原因は萌葱にもあると言っているよね？）

・失礼にも決闘を申し込んだ（やむを得なかった事情有りと思われる）

・魔術が使えないと言っておいて似たような能力を使った（もしかして騙したことになるのか？）

・腹に拳を叩きこんだ（……………）

……思い返してみても洒落にならないことばかりやっていた。

特に最後のは酷い……

それなのにも関わらず目の間にいる女性は刻季に向かって素晴らしい表情を向けている。

（やばい、惚れそうだ。）

……と刻季が思ったかは定かではないが、そうなるのも仕方ないと思えるほど魅力的な表情だ。

華音は頬を赤らめたまま、刻季の返事を待っているようだった。

「あの……会長？」

「はい？ ご飯の用意もお風呂の用意もありますよ。そして……」

……

そしての後が気になったが

「いや、それは一先ず置いておいてください」

「そう……、ですか？」

ちよこん、と首をかしげている。

「それではなんなのでしょう？」

「では……。何故会長が俺の部屋にいるのですか？」

「それは、羽間様にご奉仕をしようと思ひまして」

「そしてその羽間『様』ってのはなんなんです！？」

あまりにも聞き逃せない言葉だ。

「お仕えする方をその様に呼ぶのは間違っているでしょうか」

「お仕えする……？」

当然のように啞然となる。

もちろん「仕える」という意味が理解できないわけではないが、理解を拒んでいる感覚を脳に感じている。

「はい。私は決闘の敗者ですから」

とあっさり言い放つ。

「なぜ負けると仕えることになるんでしょうか……？」

「私は天原家ですから……」

と華音の顔に少しの影が差した。

「天原家は魔術師の家です。魔術師とは弱者が強者に仕えるとなっています」

確かに刻季も昔の魔術師はそうにして家を大きくしていくと、家格を高めると聞いたことがあった。

たしか必修科目である『魔法史』で習った。

しかし、

「今はそんな時代でもないじゃないですか」

現代では魔術は誰にでも学べるところにある。

昔の魔術師の数百倍、数千倍の数があるのだ。

そんなことをしなくても家は大きくなる上に、才能さえあれば人が集まる。

実際弟子などを取っている例もいくつもある。

それでも華音はそんな返事を予測していたかのように

「私の家は天原です」

「……」

天原家

トウエルフス

12 師団の一角にして魔術の歴史そのもの。

それこそ日本魔術史の最初から名前が出てくるほどの古い家だ。その名前が出てくるとなかなか言い返せなくなるが知り合いに一人師団の家の出がいる。

「でも萌葱とは決闘をしてもその様なことにはなりませんでしたよ？」

萌葱とは物心がつく頃から戦いをしていた。

刻季が負けることはなかった。

南雲家も師団の家だ。

萌葱の父親の代で現在の師団の次席に就任している。

「南雲家は新しい血を入れることを積極的に行っています。そして現在の当主も寛容な方です。そのようなことになることは無いでしょう。」

刻季は、確かに萌葱の父親がそんなことを気にしている素振りはなかったなあ、とどこか他人ごとのように思っている。

「しかし天原は違います。記録によると現代まで20旅団以下の家格との婚姻がなされたことは一度もございません」

20 旅団は師団の直の下位組織にあたる20の家だ。

成立は師団の成立から50年後だったと刻季は記憶していた。

要するに、根っからの古い家ということだ。

魔術師の血を薄めないように婚姻まで仕切っている。

そんなことまでする家柄で過去の事だと、過去にだけ行われていた事だと割りきれなかったようだ。

「たとえ羽間様がお仕えないことをお許しなさると申されましても、私のお父様は許すことは無いでしょう。なので是非、私を傍に

置いてください」

ここにきてようやく、どうやら自分とはとんでもないことをしてしまったらしい、と刻季はようやく思い至った。

華音の意思は固いようだった。

この部屋に来てからの確たる意志を持った瞳は少しも色を損ねていない。

その瞳を見ながら刻季がしたことは

「あの、とりあえず仕えるとか仕えないとかは置いておいてください」

先延ばしだった。

「色々聞きたいことがあるんですが聞いても良いでしょうか？」

「はい、我が君。なんでもお答えしましょう。それと敬語をやめてください」

敬語の事は無視をして質問をすることにした。

「では遠慮なく……」

前置きをしっかりと置き

「その格好はなんなんですか!？」

制服姿にエプロンという男子高校生が彼女にやってもらいたいシチュエーショントップ10に入るであろう憧れの格好だ。

「これですか？」

と華音はエプロンの裾を掴んで言った。

刻季が首をコクコクと振ると珍しくすこし不安そうな表情を浮かべ「似合っていないでしょうか？」

「いやめっちゃくちや似合ってますよ!！」

思わず叫んでしまったようだ。

そして華音はその答えに安心したように微笑んだ

「それは良かったです。ありがとうございます」

彼女の笑顔には魔力が込められているのではと推測出来るほど魅力的な笑顔だ。

「ってそうじゃなくて！　なんでそんな格好してるんですか？」

「羽間様がお喜びになると思いました……」

「確かに僕は今この降って湧いたようなこのシチュエーションになり喜んでますが……」

本音をぶちまけている刻季。

ありがたく状況を享受しているようだった。

「まあそれは置いておいて……」

しかも嬉しいからそのままにしておくようだった。

意外とちゃっかりとした少年なのかもしれない、と華音は分析していた。

「それから、ここ男子寮ですよ？」

刻季がそう言ってもキョトンとして、なにが？って様子だ。

「どうやって入ったんですか？」

「生徒会権限です」

「それ悪用しすぎですよね！？」

たしか刻季が生徒会に入ること断った時も使っていた。

「ですが、なかなか入ってくださる仰らなかつたので……」

「僕の意味は！？」

拗ねたように言う華音に刻季はつつこんだ。

もしかしたら彼はツツコミなのかもしれない。

「南雲さんから入ると聞かされていて、突然断られると意地になっ

てしまうものです」

頬を膨らませて華音は憮然して言った。

萌葱は何と伝えたのだろうか、と気になっている。

「僕入るだなんて全く言ってないんですけどね……」

「そんなに生徒会に入るのが嫌でしたか？」

「決して嫌なわけではないですが、……むしろかなりの高待遇でぶつちやけ入りたかったです」

「ならどうして……」

「僕魔法が使えませんか」

にこつと笑って言う刻季。

すると何故か華音は顔を赤らめた。

「あなた様の笑顔はどこかずるくて、凶悪ですね……」

「え？　なんですか？」

刻季は華音がボソツと小さい声で言ったため聞こていないようだ。

「いえ、なんでもございません」

「そうですか……」

刻季もそこまで気になっていなかった。

「それでは何故私は羽間様に負けたのでしょうか？」

華音は赤らめた顔を元の無表情に戻すと言った。

「魔術が使えない羽間様にどうして私は完敗したのでしょうか？」

「答えなきやダメですかね……？」

「もちろん、強く聞くことは出来ません。しかし仕えることになった以上主人の事は出来る限り知りたいたいと思っています」

それは真剣な願いだった。

「仕えるとか主人とかうんぬんかんぬんは置いてお教えします。ですが約束があります。他人にこの情報を教えないでください」

「他人とはどの辺りから他人に該当するのでしょうか？」

「先程あの場にいた方達なら大丈夫でしょう。萌葱も信用しているようでしたし、僕の代わりに説明してもらえると逆にありがたいくらいです」

「かしこまりました、我が君」

恭しく頭を下げる。

刻季は何かこの女性がやることは全て様になっている気がすると思っていた。

説明を始める。

ここまで踏み込んできた人は久しぶりだった。

「僕は魔術が使えません。しかしそれは魔力が無いということではないと昨日も言いましたよね？」

「はい。人より魔力所有値が高いぐらいでした」

「そうです。魔力の所有値が高いということは即ち、魔力をより多く身体に溜めることができます。そこに昨日はあなたの魔術で使用していた魔力を吸収し溜めました」

「魔力を吸収し溜める……？」

「僕は特異体質なんです。最高で5mほどの近さにある魔力を吸収することが出来ます」

「もしかして魔術が突然消えていたのは……」

「失礼ながら僕が吸収しました」

「ですが今は何ともありませんが……？」

「魔力を吸収する範囲は自分である程度調整できます。だから現在は僕の0距離のところの魔力が吸われているということになります。それと僕が吸収出来る魔力は体外に無いとダメなんで一度魔術などを使用しないと吸収できません」

「色々と制約のあるモノなのですな」
しみじみとした感じで華音が言った。
なかなか順応能力が高い。

だがこの能力はそれだけで終わらない。

「そしてこの魔力を僕は使うことができます」

「ですが羽間様は魔術が使えないと……」

「魔術は使えません。いくら練習しても使えないままです。ですが魔力は使えます」

「魔力を使うと魔術を使うとはどう違うのでしょうか？」

確かにほとんど同じ意味の言葉だ。

「吸収した魔力を使う能力です」

「能力ですか……」

吸収よりも恐ろしい能力。

忌避された能力

「それは時間を止めることです」

「時間を止める能力……？」
ちから

「はい。自分にある総魔力量の分だけ止められます。そしてその間だけは僕以外の存在は何もすることができません。ただただ止まっています」

淡々とその様子を思い浮かべながら刻季は説明した。

「もしかして突然殴られたのは……」

「もちろん使いました。あの節はどうもすいませんでした」

殴ったことを思い出してペコリと頭を下げる刻季。

「しかし能力を使わない限り勝てないと思いましたから使いました。会長は本当に強いです。能力を使わなきゃあっけなくぼろ負けして

いたでしょう」

「いえ、我が君。その能力も含めてこそ羽間様です。私が勝つなどというそんなおこがましいこと仰らないでください」
「なんか本気で言ってるようだった。ほぼ心酔の域だ。」

困りながら刻季は言った

「僕なんて碌でもない人間ですから。そんなこと言わないでください」

「羽間様が碌でも無いなんてことは万が一にもございません。冗談でもそんなこと仰らないでください。私悲しいです」
「思わず同情したくなるくらい悲しさが伝わってきた。
僕の事なのに……、と刻季が刻季自身に同情しかけた。」

刻季は埒があかなかつたので話を進めることにした。

「と、とにかく！僕はこの能力があるから生徒会に入ることではできません。せつかくお誘いいただきましたが……」

「もう生徒会は良いんです」

「……へ？」

刻季は情けない声を出した。

「役職上とは言え、私の下に羽間様を据えることはできません。まさか生徒会長をやめるわけにはいきませんし」

「そつちツスカ！？」

「そつちツス！」

華音が碎けたセリフを初めて聞いた。
言った本人は照れて顔を赤らめている。

なんかギャップっていいね！！

と、刻季は声高に叫びたかったが、華音の手前我慢した。

「それでは質問は終わりでしょうか？ 羽間様」

顔を赤くしながら華音は言った。

「あと二つほどいいですか？」

「はい。なんでもお聞きしてください。」

「その羽間『様』と言うのは何とかならないんですかね？」

2つも歳下に様呼ばわりは無いだろう。

「『羽間』様、ではお気に召しませんか？」

「気に入らないってわけではないんですよ。ですがやっぱりこっ……

…、そうだ！ 出来るだけ親しみを込めた呼び方がいいんじゃないですかね？」

「親しみですか？」

華音はその言葉を聞いた瞬間ぷるぷると震えだした。

何かやかしたかと刻季は不安がるが。

「私、嬉しいです！ 主人となられる方にそこまで気を使っていただいて」

苦し紛れに言った言葉で思いのほか喜んでくれた純粋な華音は満面の笑みを浮かべて言った。

「えっ…… あっはい！ 喜んでもらえて嬉しいなあ……」

目が完全に泳ぎながら言っている。

いつの間にか主人という単語を許容していることに刻季は気づいていない。

「嬉しいですがその前に羽間様、私への言葉づかいを何とかしてくださらないと困ります。これからは私の事を華音と呼び、敬語をやめてください」

「えええっ……、それはちょっと……」

「それでは呼び方は残念ですが、そのまま据え置きとさせていただきます」

厳しく言い放つ華音。なんか通販番組みたいではないだろうか。

「わかりました。……いやわかったよ。華音………さん」
「『羽間様』」

睨まれた。

あの美女がこんな威圧を放てるのかと思うくらい。

萌葱も怖いから……、と刻季は思い至った。
しかしこれでは呼び方を変えないらしい。

恥ずかしさが頂点に登りながらも意を決して

「華音」

名前を呼んだ。

華音自身も恥ずかしくなりながらも

「はい、刻季様」

につこりと……

笑ったのは良いのだが！ 笑ったのは良いのだが！ 可愛いのだが！

「刻季様」じゃなんにも変わって無いんじゃないかな？」

「『羽間様』から『刻季様』ではだいぶ変わっていると思いますが、
親しみも込みますし」

根本的な解決になって無かった。

「ダメでしょうか……？ わかりました。あまりに生意気すぎでした。反省します」

無表情だがどこか悲しそうにしながら言った。

しかし華音はその後も

「でしたら『旦那様』様とお呼びさせていただいてもよろしいですか

？」

爆弾を落とした。

エプロン着てもらい『旦那様』とは良い身分である。

今の時点で萌葱に一回、仁吾に一回、学園の生徒に数百回殺される心配があるのだ。

刻季の新しい友人にも華音のファンは多数いる。

だからなんとかそれだけは回避しようと刻季は頭を下げながら

「それだけは勘弁して……、刻季で構いませんから……」

華音はパツと顔を明るくして言った。

「はい！ 我が君、刻季様」

結局根本的な解決には至らなかった。

しかしこの表情が今僕にだけ見れるなら良いかな、と刻季は思っていた。

殺されることは変わらない気がするが……。

「それで刻季様、もうひとつの質問は何なのでしょう？」

刻季は今一番向きあいたくなくて目を瞑って逃れようとしていたものに触れることにする。

逃れられないと判断したのだろう。

そして声を張り……

「そのでかいボストンバックはなんなの！？」

見えていたのだ、しかし見たくなかった。

思いつきりバックの口は開いていて中には服やら化粧ポーチやらが顔を出して覗いている。

短くても1週間程度外で過ごせそうな量の日用品だろう。

またしてもキョトンとしている。

「それはお泊ま……」

刻季はそこで華音の話を区切った。
聞きたくない単語が聞こえてきそうな気がしたからだ。
半分以上聞こえているようなものだが

「華音は自宅から学園に通っているんだよね!？」

強引にそこまで聞きたくないことを聞く刻季。

不審に思いながらも丁寧な華音は答えた。

「ええ、私の家は都市学園内にありますから。……あの、それが
んなのでしょうか? 刻季様」

「帰る家が近くにあつていいなあ! 僕なんかもう10日以上も帰
つてないから、姉さんが今頃寂しがってるんじゃないのかなあ!
いやぁ羨ましい。僕も家が近くにあつたら毎日そこに帰るよ!」

まるでわけのわからないことを言いながら、何とか華音を自宅に帰
そうとしている刻季。

ただそんなのが通じるわけもなく。

「私も今日から当分帰れないんですね。少し寂しいです」

何処から帰れないんだ? とは聞けなかった。

答えははっきりしている。

あまり権力を使うことを良しとしなさそうな彼女が権限を使つてま
で男子寮に入っていることが何よりの証拠だろう。

でも聞かなければいけない。

答えが未定から確定に変わってしまったとしても。

今日何度目だ思えるくらい意を決して刻季は聞いた。

「華音はこれから帰るんだよね?」

「何言ってるんですか? 刻季様。もちろんこれからの世話をさ

せていただくに決まっているじゃないですか」
ものすごいいい気味で答えをかぶせてきた。

刻季が帰ると発するとほぼ同時に返ってきた。
少し声が弾んでいる為、表情は無いがどこかルンルンしているように見える。

やはり聞きたくなかった。

学園は国立の為お金あるが、生徒に使えるのは限られていて学生寮はいくつもあるがそう大差はなく、すべてワンルームである。

このあとこの美女を返すのに3時間程かかって、華音が作った食事を食べる前に寝てしまった。
それにしても良く帰ってくれたな、と夢の中で刻季はおもった。

第06話 主人とメイド？（後書き）

華音キャラ変わりすぎだろ、とかすいません。
好みのキャラにしすぎました。

今回で完璧にストックが無くなりました。

プロットはあるのですが、合っていないようなもんです（笑）

出来る限り早く更新したいと思います。

次回でやっと冒頭に戻ります。
ホントに長い一日だ。

第07話 ビーフシチュー（前書き）

結局プロローグ行く前に切ってしまいました。
すみません……

第07話 ビーフシチュー

朝になって刻季は狭い所に設置されたキッチンに向かった。
キッチンには一つの鍋が置いてある。

蓋を取ってみると中には美味しそうなビーフシチューが鍋いっぱいに入っていた。

美味しそうな料理を見てする行為ではないとわかっていつつも刻季はため息をついた。

運が良ければ昨日の事全て無かったことになってないかなあと思っていたが、そう都合のいいことは起こらないらしい。

僕がいったい何をしたんだ……、と刻季は嘆くがそれなりのことをしちやっているので神に見放されても仕方ないだろう。

刻季は珍しく仁吾を朝から部屋に呼びいれた。

「さあ食べよう！ いただきます」

無理にテンションを上げて、仁吾にビーフシチューを勧める。

「なあ刻季。なんで朝からこんなの食わせんだ？ 俺正直腹もたれそうなんだけど……。しかも量もこれ一人分じゃねえだろ」

「いやあ、昨日楽しくなっちゃって作りすぎちゃったかな」

「昨日あの落ち込みようだったのに何があったんだ？」

仁吾が不振に思い始める。

内心では焦っているが隠しながら言い訳を始める。

「悩んでいても仕方ないし。よくよく考えてみれば、萌葱は事情知ってるからきつとなんとかしてくれたんじゃないかなって思ってたね」
「まあ南雲ならそうするだろうな。……それで気を持ち直してこれ

か？」

「仁吾ビーフシチュー好きじゃなかったっけ？」

流石に3年の付き合いともなると好物も知っている。

そして刻季が料理好きな上、家事万能男だと知っているから味の心配はしてないだろう。

過去に刻季はホントに嫁にしたい男だよなと、本気とも冗談ともとれる顔で言われたことがある。

気を落としながら仁吾は

「好きだけどよ……、好きだけど朝食食べるのはちょっと……。それに量も半端ないぞ」

「大丈夫、大丈夫。ていうか朝しっかり食べないと元気でないよ」

「これは食べすぎだろ！」

仁吾は声を上げた。

ダイニングテーブルの上にはシチューを始め、フランクパン、サラダが約5人前ぐらい置いてある。

客観的に見ると確かにかなり多い、と刻季は思っていた。

華音は一体、どれほど刻季に食わせるつもりだったのだろうか。

自分の事を棚に置いて仁吾に消費させようとした。

仁吾は大食いだが、それでも残りそうなくらい多かった。

しかし悩んでいても仕方がないので刻季は一口、スプーンを口に運んだ。

美味い。

声を失わせるほど美味しいシチューだった。

体の細胞がなんか喜んでいるというなんとも奇妙な経験をしている。目の前で恍惚（こうこう）とした刻季を見ながら、なんだこいつ？と思ひながら

仁吾も一口嚙る。

恍惚となった。

頬が緩んで男前の顔を台無しにして。

「お前の料理ってこんな美味しかったっけ？」

実に張りのない声を出して、どうでもよさそうに聞いている。

「ハハハ、ウフフ」

刻季はなんとも気持ち悪い声を出して誤魔化していた。

「ハハハ、アハハ」

なんか仁吾にも伝染^{うつ}ってる。

気持ち悪い二人が5人前をたいらげたのは、それから30分もしない頃だった。

結局全て美味しくいただきちゃったみたいだ。

今刻季と仁吾は二人で寮から出て学園の校舎に向かっている。

学園までの距離はそこまで遠くない。

通常の学校に通う学生の半分くらいの短さなので、割合楽に、悠々と通っている方だろう。

食事時は無理に明るくしていた気分は、やはり生徒会のいつもの集まりがあると思うと刻季は歩きながら憂鬱になってきた。

時間を止めるなんて云うとんでもない力があるくせに、学園に着くとと経っている時間が止まらないかなあ、と冗談にならないことを思っていた。

やがて校門が見えて、その先にいつも通りの人ばかりを見つけた。心がどんどん曇っているのを理解しつつも通らなければいけない――校門（壁）を超える。

しかし壁はひとつではない。

むしろ次の壁を越えたら本日はそれなりに幸せな時間を過ごすことができるだろう。

横で話しかけてくる仁吾の事を見る余裕すらなく一人ごみ（壁）の横を急いで抜けようとしている刻季の心臓はドキドキのバクバクだった。

そんな状態の刻季を訝しみながらも、昨日の事を知っている仁吾は気をつかい刻季と並んで横を通り過ぎようとする。

人ごみの真横に到達した頃だろう、刻季はチラッと中心を見た。

中にいる生徒会の面々は悉く刻季の方を見ていた。

実際は人ごみのせいでこちらが見えるわけではないのだが、みんながモデル体形で身長が高いことと、横にいる仁吾の大きさが目立つことからだいたい視線がこちらに向いていることがわかっていた。

今日は萌葱もその中にいた。刻季を思いっきり睨むような眼つきで見ている。

睨まれてもその場を離れることしかできないのでいそいそと動きをはやめる。

仁吾もその動きに気付いたのか、それとも萌葱の眼つきに恐れをなしたのか、刻季の動きに同調する。

人ごみに混ざらない人自体あまりいないのに、二人組で避けるように通ろうとしているので奇異の目からは避けられなかったが、刻季はこの場で止まって大変なことになるかもしれないほうが嫌なので甘んじてその視線を受け入れていた。

眠つきはそれぞれだが生徒会に加え、人ごみの人まで見ているという状態をなんとか耐えて下駄箱までたどり着いた。

そこまで来てようやく肩の力を抜く。

とたんに視線と喧騒から離れて安心したのか、刻季はため息をつく。それと同時に隣からもため息をつく声が聴こえた。

刻季たちは疲れ切った表情で顔を見合わせて苦笑いをするこゝろできなかった。

教室について仁吾は鞆を自分の席に置くと、そのまま座らずに刻季のところへ向かった。

昨日からの苦惱で参ってしまったている親友を慰めてやるためだろう。野獣の風貌で誤解されやすいが、こう見えて意外と世話焼きなのだ。

「刻季」

仁吾が声をかけると衰弱した様子の刻季が顔を上げた。

そのまま仁吾は刻季の前の席に横がけで座った。

「まあ元気出せよ。さっきのでこれからは手を出さないって意思表示だったんじゃないかねえのか？」

「だといいんだけどね……」

うなだれながら弱弱しい声で刻季が返した。

昨晚の事を知らない仁吾はこれで終わったと思っている。

だがこれだけで終わらないだろうということを刻季は何となくわか

っている。

「誘うつもりがないから来なかったんじゃないのか？ それに決闘の結果で誘うこともできないだろ」

誘われるより厄介なことになったとはもちろん言わない。ていうか言えない……

「決闘の結果が絶対の学園規律だからね。強い者がひたすら上に行くという実力主義は魔術師の学園らしいよ」

「幸いあの今代の生徒会長は平等主義なのか、割と居心地のいい学園になってるけどな、創立当初は結構ひどかったらしいぞ」

「ひどかったって？」

刻季が顔を上げて聞いた。

「たしか初代がクラスのAとGで格差をしつかり作りそれを確立したとか、その次の代で、初代に心酔していた会長が生徒一人一人ランク付けにして、ランク上の人に対しては逆らえないような決まりを作ったりしたとかな」

「それは……」

ある程度予想していたが、それを超えていて絶句した。

「もしかして今もAとC、DとGで一括りにされているのってそれなの？」

「たぶんな。でもそういうのってなかなか消えるもんじゃないだろ？ だから残っていたって魔術師の風習みたいなもんだと思うしかないな。OBが改正を止めてると親父にも聞いたことがある」

「……なんのために？」

「実力主義を変えられたくないんだろ。上に立つ者としては」

魔術師は実力主義のもと形成されていると言っても過言ではない。

いや、魔術師は実力主義に徹しなければ衰退していったらろう。確実な上下関係を作り生き残ることを選んだ。

師団と旅団しかり、刻季と華音しかりだ。

前後では、希望したとしてないの違いがあるが。

「表向きは平等を謳ってるから一番質が悪いよな」

「それをわかっててもどうしようもないっていうのが悲しいね」

「長年この体制だったから変えるには時間がかかる。変えようと思わない連中が上にいるからもしかしたら永遠に変わらないのかもしれない」

「そのほうが安定もしてるし、仕方ないのかもしれないね」

「まあ安定感で言えば、平等主義より実力主義のがあるのは当然だな」

わかりきったことに、当たり前といった感じで返す仁吾。

「ま、一学生がこんなこと話しても意味がないけどな。将来出世するとしたら別の話になるが、師団が上にいるからには変わらないだろうな」

「師団かあ……」

「ああ、いや別に師団の家全部が悪いわけではないぞ。南雲家とかは柔軟な家だしさ」

「萌葱のお父さんも良い人だしね。師団が全部あんな家ならいいのになあ」

「無茶な話だな。上にいる連中が下に降りたいと思うわけがないだろ」

それが道理だった。

こんなこと話しても何も変わらないので、刻季は声を大きく出して言った。

「学園内が楽しいならいつか！」

「そうだな！ 学園生活を謳歌しよう！」
仁吾も奮い立った。

無理に元気をだそうと思っても出ないと思っていたが意外となんとかなるものだあと変なところで刻季は関心していた。

第07話 ビーフシチュー（後書き）

やっぱりプロローグの直前から話を始めたかったなので今回は少し短かったですが、前回の話と足して2で割ってください（笑）

第08話 始まりの物語の初め（前書き）

タイトルこそ格好のつけたものになっていますが……（笑）

第08話 始まりの物語の初め

——これまでの事は物語の始まりでしかない。

昼休み、教室内で食事をとろうとすると、席に数人集まってきた。

一人目は碓氷仁吾。

刻季の中学からの友達である。

二人目は南雲萌葱。

刻季の幼馴染で、生徒会に所属している。

三人目は陸奥竜也。むつお 竜也

学園に入って知り合った同じクラスの友達だ。

四人目は阪野果歩。さかの かほ

萌葱と仲良くなったことから、仲良くなったクラスメイトだ。

いきなり二人も新しいのが出てきて驚くのもわかるが、入学して10日程度経てば新しい友達ができるのも高校生の嗜みとしては当然のことだろう。

最近はおっぱら刻季を含め5人で食事やら班行動やらをしている。ちなみに朝の萌葱の不機嫌さはいつの間にか直っていた。

刻季の席を中心に群がるとまず竜也が口を開いた。

「天原会長、朝から綺麗だったなあ。あんな綺麗な人が同じ学園にいるっただけでテンション上がるぜー！」

初っ端からテンション全開の彼は、長身短髪で若々しさがにじみ出ているような男だ。

刻季は竜也に入学してすぐに声を掛けられた。

なんでも野獣の仁吾と美人の萌葱といつも一緒にいて仲が良さそうに見えたことから、少し？不思議に思ってた話しかけたそうだった。

声を掛けた人こそ竜也だけだったが、入学当初は色々注目を集めた。

だが、仁吾は言うまでもないが、師団次席の愛娘である萌葱もやはり声を掛けづらいのだ。

そしてこの長髪の根暗そうな男も……。

だが竜也の場合興味が上回ったらしい。

初めこそたどたどしい話し方だったがすぐに打ち解けて仁吾も含めてつるむようになった。

この3人に加え、萌葱と彼女の友達となった果歩とも自然と一緒にいるようになり気づけばグループのような形になっていた。

「ホントに綺麗でした。どんな生まれ方すればあのような美人になれるのでしょうか……」

こう言う果歩だが、実に愛らしい容姿をしている。

目鼻立ちがぱっちりしている童顔で成熟している美人とはお世辞にも言い難いが、無邪気さが多く残る表情には魅力があふれている。

「大丈夫よ。果歩も可愛いから」

ウインクして返す萌葱。

「そんなんっ。わたしなんて萌葱ちゃんにそんなこと言ってもらえる権利ありませんっ」

「なんの権利よ、それ……」

自分の魅力を当たり前のように理解していない果歩に呆れる萌葱。

「ねえねえ 刻季もそう思うでしょ？」

「うん。阪野さんも可愛いと思うよ」

「そんな……。ありがとうございます、羽間君まで。お二人ともお世辞が上手ですね」

「そこまで自分を否定して楽しいのか、と思えたがもちろんそんな態度はおくびにも出さない刻季だった。」

「ああ……。会長とお近づきになりたい」

「じゃあ南雲に頼んでみるよ。もしかしたら紹介してくれるかもしれないぞ」

「ぼそつと言つ竜也の言葉に無責任な仁吾。」

「そうかその手があったか！ 南雲！ いや南雲様、ぜひこの卑しいわたくしめにしよ」断る！——「ってまだなんも言つてないだろ！」

「あんたみたいなの全員につきあってたら、きりが無くなるから絶対いや。それに会長が陸奥なんて相手にするわけないでしょ」

「儼然として言い放つ萌葱。」

「わからないだろ！もしかしたらいつの日か会長が俺のところに来て『あの雨の日、子猫を助けていたあなたに惹かれていました』って告白してくれるかもしれないだろ」

「あんた実際猫助けたの？」

「助けてないけど……」

「……だめじゃん！」「」「」

「竜也以外の言葉が揃う。」

「あのおとなしめな果歩まで言葉遣いが変わっている。」

「こんな会話をしながら昼食を楽しんでいた時だった。途端に空気がざわつく。」

「なにか廊下から波になって教室に来てはいけないモノが向かって来

ているような感覚だった。

刻季は背中がぞわつとするような寒気を感じ、直感で困ったモノが来ると理解した。

理解が早かったのは実に感心できることだが、その理解をこの後に活かせなかったのは悔まれるだろう。

いかんせん、こういう感覚に対する経験が浅いため仕方のないことなのかもしれない。

経験でどうにかなるかは分からないが

その困ったモノは人の波と動揺を伴い１・Ｃに到着したもようだ。すでにクラスメイト全員が廊下との境にあるドアに視線が注いでいたが、そのモノはドアの前で躊躇していた。

あれほど賑わっていた教室の中にはいまや、沈黙しか残っていないかった。

もう一つの境である窓から見える生徒達も首を一樣に横に向けてモノを見ている。

ここまで引つ張ったが、実際にはドアの曇りガラスから長い黒髪が刻季にはチラチラと見えていた。

お察しの良い方も良くない方もここまでくればわかるだろう。

モノはやがて決心したかのように、首をコクンと振ってドアに手を掛けた。

ひと思いにガラリとドアの開く音が教室に響く。

その者は黒く綺麗な長い髪をたなびかせて教室に入ってくる。

刻季の姿を確認するとホツとしたように顔を見えない程度に緩め、決して刻季以外見ず、文字通り一目散に目的へと向かった。

刻季は弁当と箸を持ち、者がいる横を向くというあまり行儀の良い

格好とは言えない状態で迎えた。

刻季の目の前に着いた者は恭しく頭を下げながらこんなことを言うのだ。

「我が君、刻季様。お願いしたいことがあります」

1 - C + α の驚愕を以って彼女——天原華音生徒会長を迎えることになった。

「か、会長……」

萌葱の口から驚愕を文字にしたような震えがこぼれる。

そこでようやく刻季以外の存在がいたということに気付いたかのよう
に萌葱の方へ振り返り

「南雲さん。こんにちは。刻季様のご友人の皆様方もはじめまして。
天原華音と申します」

先程、刻季にしたように頭を下げた。

会長が頭を下げているという事実、仁吾は苦笑し、萌葱・果歩は
驚き、竜也なんかは震えている。

「こんにちは、天原会長。だけど俺はじめてではないっすよ」
「……？ もしかして碓氷家の方ですか？」

表情をつくらず考えて答えを返した。

「はい、碓氷仁吾っす。たぶん去年の天原家でのパーティ以来だと思
うんですけど……」

「今年のパーティですか？ あの日は人が多くてひっきりなしにお
声を掛けられていたので……。申し訳ありません」

「いやいやいいっすよ。こっちもお呼ばれたパーティで楽しめま
したから」

「そうですか。それはなによりです」
ふたりで会話をしてしまっている。

ふたりで空気を作っているのをずるいと思ったのかなんなのか、竜也は憧れの会長を目の前にしているという状況を享受しながら会話に入ることを試みた。

「あ、ああ、天原会長」

震えが言葉に籠っている。
っというかどもっている。

「はい、なんででしょうか？」

華音が竜也の方を向いた。

「は、は、はじめまして会長。お、俺、陸奥竜也って言います。むっちゃんでも、竜也でも、竜くんでもお好きに呼んでください！」

「はじめまして、陸奥くん」

竜也は自分で作った選択肢になかったが一番無難な答えだったそれを聞き肩を落とした。

刻季は華音が来たという事実には驚きはしたものの、みんなよりいち早くそれから回復していた。

回復したその頭で、華音が初めに言ったことを何故か忘れてくれているとわかり、安堵の息をもらす。

特に竜也に忘れられているのは大きかった。

華音のファンである竜也に聞かせられないことがたくさんありすぎる。

というか華音との出会いから全て言えない気がする、と、刻季は思った。

仲良くなってから毎日一緒に食事を摂っている刻季と竜也だが、刻季は竜也が華音の話をしなかった日を知らない。

だから許可したわけではないが、許容している華音との関係を知られるわけにはいかない。

このままいけばあと数分で授業が始まるため、みんなには忘れたままでいてもらうことにする。
そう刻季は頭で決定づけた。

——しかし……。

萌葱がしっかりと覚えていやがった——数分後の刻季談。

驚きから回復した萌葱が言った。

「会長！ その刻季様って何なんです！？」

「萌葱さん。突然どうなさったのですか？」

「だから刻季様ってのは！？」

「……？」

キョトンと首を傾げる華音。

何を指摘されているのかわかっていない様子だ。

「刻季っ！」

標的を刻季に変えた。

「さ、さあ？ な、なんだろうねえ」

とぼけるが汗が止まらない。

「とぼけても無駄！ 何年一緒にいるとおもってんのよ？ あんたの嘘なんて見抜けないとでも思ってるの！？」

ヒステリック一歩手前の状態の萌葱。

その後ろには果歩がビクビクと隠れている。

怖いならそっちいなきやいいのに、と刻季は冷静に思った。

「さあ、白状しなさい。今ならある程度で許してあげるから、ほら」
「その、ある程度つてのは……？」

「鳩尾」

「急所じゃないかあ！」

きつぱりと告げる萌葱に恐れながらも声を張る刻季。

「なによ。もっと『程度』を上げてほしいの？」

「いやあ……」

「嫌なら今すぐ正直に言いなさい。嘘を言うなら……」
笑って言うが眼が全く笑っていない。

綺麗な深緑色の眼がただただ淡々と言葉の続きであるだろう、『わかつてるわね』とだけ告げる役目をおっている。

刻季は助けを求めて仁吾と華音と竜也を流すように見た。

しかし、仁吾は肩をすくめて明らかに事の経過を楽しんでいて、華音はキョトンとしているままで、竜也はその華音の方を見て目すら合わせずにいた。

男友達二人に心の中で、おぼえていろよ……と言い、自分ひとりだけでの解決を目指すことにした。

刻季は冷静に分析し始めた。

このまま正直にいつて鳩尾パンチだけで済むはずがない。
だったら危ない道になるが誤魔化す方が被害が少なくなるだろう。

萌葱のパンチはくらうと一日は痛みが引かない。

もちろん経験談だ。

刻季自身がそれを引き出したことはそれこそ数えるくらいしかないが、仁吾に付き合ってくらった回数は優に歴代の天皇の数を超える程だろう。

小学生の時なんか自分以外の男に触れるのも怖がるくらいだったのに今ではとんでもなく成長してしまったなあと刻季は感慨深げに嘆きのため息をもらす。

ともあれ誤魔化し回避への道を進むことに決めた。

「萌葱の言ってることがよくわかんないよ」

言った途端に殺気が萌葱からわきあがる。

自分とて魔術は使えないモノの魔術師の名乗る身としてオーラという言葉は使いたくなかったが、殺意のオーラとしか呼べないものが萌葱の背後から漂っていた。

そのオーラだけで人が斬れそうだった。

ここからは引き返すことも、選択肢を間違えることもできない。

間違えたその日には刻季の血まみれの姿を見ることになるだろう。なんとかその状況から避けるため奮い立たせる。

「刻季、いい？ あたしね。嘘が大嫌いな。刻季なら。わかってるよね？」

一言一言区切り諭すように言う萌葱。

「だからね。嘘つくといつい手が出ちゃうな」

「どんな嘘発見機なんだ！」

「大丈夫よ。嘘つかなきゃ可愛いモノよ。この萌葱ちゃん嘘発見機は」

ウインクする萌葱。

やはり眼は笑っておらず、殺気もそのままだった。

やはり萌葱は何かあったと確信している。

言質が取りたいだけみたいだ。

「えーと、やっぱり萌葱の言いたいことがわからない。どうしたの

急に、さ」

言葉を選びながら言う刻季。間違えたら血まみれだぞ。

「ふーん、優しくしてあげても嘘をつくんだ？ 誤魔化すんだ？」
悪戯した子供に誘導尋問をかけているような怖さがあった。

「じゃあ質問を変えてあげる。ちなみにこれが最後の質問だから……ね」

言外に最期と告げている萌葱。

「昨日天原会長と何があったの？」

まるで浮気をした男への聞き方だった。

それはとことん刻季への核心を突いた質問だった。

だから精一杯誤魔化した。

「萌葱も一緒に居たから知ってるでしょ？ なんでそんなことを」
会長を置いてけぼりにして会長の話をしている。

華音はいまだに起こっていることまるで理解していなかった。

「昨日生徒会に誘われて……それで終わりだよ」

「ホントにその答えでいいのね？」

最後の審判を下そうとしている。

「うん。会長とはあのままだよ。だからなんで来たのかもわからないよ。萌葱に用事じゃないの？」

目の前に華音がいるのに酷い言い草だとは思ったが命が懸かっている。

「え？ そうなのかなあ……」

萌葱も疑心暗鬼になっている。

攻め時はここだ。

と思ったがこの後思わぬところから爆弾を落とされることになる。

もちろん、華音だ。

「やですわね、刻季様。私の事は『華音』とお呼びしてくださいと仰ったではないですか」

……終わった。

たった一言で今までの苦労を全て水泡に帰された。

しかも指摘するところこかよおおおと最期のツツコミを刻季は心の中でした。

もう萌葱のほうを見られない。

その方角から熱を感じた。

なんか熱を發しちゃってます。

「……刻季？」

皮膚の表面では熱く感じるものの、耳に届く声は冷え切ったモノだった。

「やだなあ、刻季は。嘘は嫌いだって言ったのにね。なんか途中信じちゃいそうになったよ。なかなか御上手になったんですね？」

耳にどんどん冷たい声が届く。

「もう、ホントにお茶目なのは相変わらずね。もつと落ち着いて優先順位を考えてほしかったなあ。どうなるかなんてわかっているはずなのにねえ」

「萌葱、待って!!」

徐々に近づく拳。

どんどん大きく見えてくる。

もう次の瞬間には俺はいないのか、と感慨深く思っていた。

のだが……。

届く直前に拳は刻季の目の前で止められた。

もちろん萌葱が自発的に止めたわけではなかった。

じゃあ何故？と刻季は思ったが、その解はすぐに解けた。

いつの間にか刻季の横に侍従のように着いていた華音の右手によって止められていた。

そして無表情ながら声を高らかに上げた。

「申し訳ありません、南雲さん。いくら生徒会役員であるあなたでも『我が君』を傷つけることは許すことはできません。私は刻季様にお仕えする身として刻季様に危害を加える者からお守りすることを義務付けていますので、どうか」

彼女が落とした爆弾はさっきよりも更にドでかいそれだった。

第08話 始まりの物語の初め（後書き）

新キャラ氣に入っていただけとありがたいです。

ちなみに刻季の名字は最初、『羽間』ではなく、『陸奥』でした。
むつときって言いにくいので変えました。

もしかしたら陸奥が主人公だったかも（笑）

次話は華音のお願いの話になります。

第09話 お願ひ（前書き）

アクセス解析しました。

9000pvと1500ユニークという、たくさんの方に見ていた
だいて嬉しい限りです。

ですがこれおもしろいんですね……？（笑）

第09話　お願い

「申し訳ありません、南雲さん。いくら生徒会役員であるあなたでも『我が君』を傷つけることは許すことはできません。私は刻季様にお仕えする身として刻季様に危害を加える者からお守りすることを義務付けていますので、どうか」

華音の落とした爆弾は色々終わったと思う刻季のみならず、注目をしている全員に驚愕といった形の被害を与えた。

一人何に驚いているのかわかっていない加害者の華音は、またしても沈黙が横たわるこの教室に疑問を抱いていた。

「我が君……、刻季様……、お仕えする……、お守りする……」

萌葱が華音の言った衝撃な単語を一つ一つ呪いまじなのように呟いている。いまだ刻季に向かっていった拳は彼の眼前で華音によって止められていた。

だがそこに込められた力は先刻ほどのモノではなく、ただ拳を降ろすことを負けることと同義だと勘違いしている子供のように下げるに下げられなくなっていた。

萌葱はこれを下げたら刻季との繋がりを失ってしまうのかもしれないとお門違いのことを思っていたが、それだけ華音の言ったことが今までの『萌葱と刻季の繋がり』より大きく聴こえたからだ。

そんな萌葱の様子に気づかず、刻季は先程から爆弾を卸市場のたたき売りか何かと勘違いしているような華音を見て、ここ二日で何度

目か数えるのも億劫になるぐらいの回数のため息をついた。
そしてそこでちらりと周りを見た。

華音が来たことに動揺して自己紹介の終わった後はただただ華音を見つめる為だけに作成されたロボットのようになっていた竜也は蕩けていた表情を驚きへと切り替えていた。

仁吾はやっぱり苦笑していたが、刻季には表情の節々から驚きが見え隠れしているのがわかった。

果歩に関しては華音が来てから驚きの表情を一寸たりとも動かしてなかった。

刻季はもう一度大きくため息をつき、とりあえず一番混乱の度合いの酷い目の前の幼馴染を呼び掛けた。

「萌葱」

「……………」

返事がない。

原因である一連の騒動を起こしておきながらなにがあったかは理解こそしていない華音は刻季のやりたいことをなんとなく把握したらしく掴んでいた萌葱の拳を離れた。

腕がだらりと支えが無くなり床に向きを変える。

離れた途端に萌葱は、あっ……、と声を漏らした。

そこで正気に戻った萌葱が寂しそうな顔をして、刻季を睨みつけた。

「あの、萌葱さん……？」

睨みで竦み上がりながらも恐る恐る萌葱の返事を待った。

「刻季」

毅然とした声を出す萌葱。

「は、はい！」

「あんた、会長とどんな関係なの？」

「えーと、ただの生徒と生徒会長の関係としか……」

「嘘いいなさい！ 生徒会長が一人の生徒に『様』呼ばわりするはずないでしょ！」

尤もなことを言う萌葱。本日何度目の指摘なのだろうか。

確かにそうなのだが、刻季にもやむにやまれない事情が有ったと主張したい。

「そうですね、刻季様。私達の関係はただの生徒と会長なんかの関係では無いではないですか」

また余計なことを言う華音。

しかも顔を赤らめて

「ちよっ……、会長！ 誤解を招くようなことを言わないでください！」

「会長とお呼びになるのはやめてくださいと言ったはずですよ」

「いいから誤解を解いてください！」

「いくら刻季様からの命令とはいえ、呼び方と言葉づかいを直していただかないと聞くことはできません」

ぷいっと可愛く首をそらす。

そんなことをしたら、今度こそ萌葱がどうなるかわかったもんじゃないが、今は誤解を解く方が先だった。

なんか殺気が教室中に蔓延しているように黒ずんでいた。

茶色の綺麗な髪の毛は今や逆立っていた。

なんらかの魔術を使っているのだろうか床が揺れ、ゴゴゴゴゴ、と音がしている気すらする。

早いとここの状況を打破しないと、刻季どころか教室の生徒全員の命が危なくなりそうだ。

そう思い、

「華音、なんとか誤解を解いて」

蚊の鳴くような声で言った。

だが教室は静けさの中にあつたので、聞こえないクラスメイトはいなかった。

「はい」

久しぶりに笑顔を見せた華音は萌葱の方へ向いた。

「本当の事を仰ってください。天原会長」

萌葱が華音に促す。

「はい、南雲さん」

言葉を一言一言大事放つように言った。

「私と刻季様はご主人様と従者？ メイド？ 奴隷？ などの関係に当たります」

今日の爆弾だった。

「華音――っ！！」

「はい？」

相も変わらず自分の落とした爆弾の威力を理解していないらしい。キョトンとしている華音は呼ばれたことで新しいご命令をいただけるのかと心待ちしていた。

果歩は、あわわわわ、と奴隷と言う単語に必要以上に反応していた。

「刻季い――っ！――！」

刻季は魔力の流れを感じた。

「わわ、待つて待つて萌葱！ 教室がー！ 机がー！！」

近くにあった机一（刻季のを含め複数）が全てのつなぎ目を無くしたように音をたてて部品と化した。

そしてその部品は形を変え、人を殴るのに適しているような人の身長ほどある巨大な拳の形態になる。

南雲家にのみ伝わる形態魔術だ。

変化した物質の質量の分だけ自由自在に物体を操ることができる。生物以外に有効な魔術で範囲こそあるが、生命さえなければなんでも形が変わる、南雲家先祖代々使用してきた魔術。

刻季と華音の周りに巨大な拳がいくつもできた。

光が差す隙間さえ少なくなり逃げ道は無く囲まれる。

このままいけばボコボコに殴られてしまうだろう。

そう判断した刻季は、能力を使って巨大な拳から魔力を吸収した。

吸収した途端に、拳はくしゃり、と弱弱しく崩れて横たわった。

拳だったものは、多少の面影は残っているが指の位置が分からなくなるくらいにただの物体へと変化した。

刻季たちと周りを遮るものは無くなり明るくなる。

その光を見て安心した瞬間、萌葱がまたしても近づいて殴りかかってきた。

「刻季ーーーー！！」

しかしやはりその拳は華音によって止められた。

「南雲さん、我が君の害になるような事をなさるおつもりなら私が相手になりますよ」

「会長はどいてください！！ こいつを更生させないといけないんです！」

「我が君以上に清廉潔白な方はいないでしょう。更生なんて必要ありません」

「メイドだ奴隷だ言ってる人のどこが潔白なんですかつ！？」

二人がやんやんややってる間に竜也が鬼気迫るといった形容が正しいだろう歩き方で刻季に近づいてきた。

「刻季っ！ お前生徒会長と何やってるんだ！？ ずる……いや、人として見損なったぞ！！ なんでお前ばかり羨まし……いや、お前に倫理観というものはないのか！？」

思考がダダ漏れだった。

竜也の瞳には4割の怒りと4割の嫉妬と2割の羨望が混ざっていた。やはり羨ましいのか……。

「メイドや奴隷はご主人様の趣味なんです」

そこら中に爆弾をばら撒いている華音が、もう止める気にならないほど自然と爆発を促していた。

「なっ……！ 刻季そうなの！？」

怒りと恥ずかしさで顔を赤くする萌葱。

「俺もメイドは好きな方だけど奴隷はやりすぎだな。もっと健全な方がいいぞ」

仁吾はにやけながら言った。

思わぬところから伏兵がでてきた。

「仁吾……！！ なんで！？」

裏切りを受けて愕然とする。

仁吾の表情には『面白いから』と書いてあるようだった。

「俺はメイドが大好きだ！！」

もう取り繕うこともやめた竜也からも遠距離口撃をくらう。

「わわ、わたしはそーゆーのよくないと思いますっ」

一番まともな果歩からも言われる。

「うっ……」

戒めなのだろうが、傷だらけの刻季の精神には一番のダメージがあった。

「刻季どうなのっ!？」

「ははっ、メイドに奴隷ねえ」

「羨ましいぞ!! 羨ましすぎるぞ 刻季、俺にもご奉仕してくれるように頼んでくれっ!」

「私の身も心も刻季様のモノですので」

「ふ、不健全ですう……」

各々好き勝手なことを言ってくれている。

教室の中も『メイド』や『奴隷』やらの単語が飛び交っている。

「もう、やめてくれーっ!」

刻季のせつな願いは空へと放たれた。

あのままでは收拾の兆しすら見えなかったので、落ち込んでいる刻季を華音が連れだって生徒会室まで来ていた。

刻季・華音以外にも仁吾と萌葱がいる。

果歩は遠慮し、竜也は厄介だったので強制的に遠慮させた。

刻季は着いて華音の出してくれたコーヒーを飲み、落ち着くと昨晚

の話をし始めた。

華音が話に加わると面倒なことになりそうだったので、とりあえず口を出さないでもらうことにした。

「——というわけなんだ」

全部語り終わると華音が口を開いた。

「刻季様、今の話の中に何回『不本意ながら』と使えばよろしいんですか？」

「いや……だつて本意じゃないし……」

それが本音だった。

「とにかく、刻季。それで全部話し終わったの？」

また二人で話し始めてしまいそうになったのを危惧して萌葱が言った。

「うん。とりあえず、こんなもんだと思う」

「ほお、あのシチューは会長の手作りだったのか？ どおりで何かおかしいと思ったよ」

罪悪感に押しつぶされそうになりながら刻季は

「騙すつもりは無かったんだけど……」

「刻季様、食べていただけたんですか」

「ええ、美味しかったです」

「それは何よりです。腕によりをかけて作ってよかったです。でも今度は私と二人で食べていただけるとありがたいです」

少し不満げに言った。

「じゃあ今度一緒に食べましょう」

「はい、よろしくお願い致します」

恭しく頭を下げる華音。

また取り残されている萌葱があわてて

「会長、刻季の話に間違いはありませんでしたか？」

まだ疑わしいといった眼を向けて言った。

華音は、そうですね……、と考えて

「そういえば、ベッドでの情事が入って無かったですね」
今度は虚言のボムだった。

「じよっ……、刻季い！！」

「いやいやちよつと待って！ 会長！ 嘘はやめてくださいよ！！」
慌てて訂正させる刻季。

「そんな……、一夜だけの関係だったのですね……。そうですか……。でも私は大丈夫です。あなた様と一回でもそのようになれた、という思いだけで生きていきます。もし子供が産まれたら一文字いただいてもよろしいですか？」

思わず同情してしまいたくなるほどとてつもなく可哀想な眼で見つめる華音。

「ご主人様に責任を取れだなんてそんなこと言わないので安心して
ください」

「刻季——————！！！！」

鼓膜が破れそうになるほどの大声だった。

「あなた、学園^{ウチ}の会長に何してんのよ！！ 信じられない！ あん
たはそんな奴じゃないと思ってたのに……！ せめて責任はとりな
さいよ！」

完璧な華音の演技に完璧に信じてしまっている萌葱。

「ご、誤解だつて！ 会長、ホントにやめてください！ 萌葱は信じやすい子なんですから」

その言葉に、無表情でお茶目を薄く塗ったような美貌を見せて「先程から刻季様の言葉づかいが悪かったですから、お仕置きです」それはさながら、若い王にたいして説教する宰相のようだった。

「その言葉づかい直さないと……わかりますね？」

これまでの華音のやってきたことが思い出されているという怖くなつた。

「はい……」

「ぜひお願いします。あなたは私の主人なのでから」

毅然とした態度で華音は言つた。

もう逆らうまいと決めた刻季だった。

「それで、なんで俺らは授業中にここに来てるんすかね」
確かに仁吾の言うとおりだった。

もうとつくに昼休み明けの授業が始まっている時間帯だ。

「もちろん、生徒会権限です」

「あんた、またそれかよおー！」

さも当たり前のことだといった様子の華音に刻季がツツコミをいれた。

「この学園の生徒会の権限つてのはどれだけ強力なんだ……」

「聞きたいですか？」

「いや！ いい！ 怖くなってきた」

「そうですか……」

あからさまに落ち込んでいる華音はもうほおっておいた。
どんな藪蛇がでるかかわかったもんじゃない。

「……あたし、生徒会にいるのが嫌になってきた」
ぼそつと萌葱が呟いた。

そう思うのも仕方ないだろう。
あれだけ品行方正を地でいくような会長がこんな状態になっているからだ。

「……まあとりあえず、なんで会長はウチのクラスに来たんすか？」
さつきまでずっと笑っていた仁吾が空気を改めるように言った。

「そうでした……。碓氷くんありがとうございます。そして刻季様……」

華音が仁吾を見てから刻季の方へ向き直り姿勢を正した。

「はい、えーと、なんかお願いがあるって聞いた気がするけど……」
遠い過去の話进行思ひ出すように刻季が言う

「はい。私が刻季様にお願いを申すことなどおこがましいにも程が有りますが、聞いていただけると嬉しく思います」
長い前置きだ、と刻季は思った。

「とりあえず言ってよ」

「畏まりました。あの実はですね……。私の父に会っていただきたいのです」

言いにくそうにした後に華音は漸く言った。

「「「お父さん!？」」」

全員の言葉がきれいに揃う。

「はい」

とだけ華音は返した。

「なんで会長のお父様に刻季が？」

萌葱が華音の説明を待たずして、早く話し始めることを要求した。

催促を気にした様子もなく華音は

「昨日一度目の帰宅のあと、父にその話をしたら、渋々ながらお送りしていただけたのですが。そのあと無理やり帰されたことを知るとものすごく怒りまして……。それで『その若造を連れてこい！』と思い切り怒鳴られまして……。それで『明日出来ればお連れします』と……」

「……………」

「あの……、刻季様？ どうなさったのですか？」

「行けるわけないでしょ……！」

心配そうに華音が言っていると刻季は声を張った。

「もうガチギレじゃん！ お父様には失礼だけどそんな状態で行ったら何されるかわかったもんじゃないよ！」

「やだ、刻季様ったら、『お義父様』だなんて……」
表情は変わらず、顔だけ赤らめて華音が言う。

「そこにくいつくなよ！ ……それに『渋々』って、昨日は行かないとお父様に許されないって言ってたよね！？」

「それは嘘です」

「悪びれもせず言っちなよ！」

無表情で淡々と刻季の言うことにくいついていく華音に、刻季はひたすらつつこんだ。

結果……

「はあ……はあ……」
ぜえぜえ息が上がっていた。

「……あの、刻季様？」

「はあはあ……、ふう……。……えつと仮に僕が華音の家に行ったとしたら、何をすればいいの？」

話を進めなければどうしようもないので、刻季は息を取り戻して訊いた。

「有ったことをありのまま説明していただければ父も理解してくださると思います」

「それは華音の説明じゃダメなの？」

「私は自分の都合のいいように説明しましたから」

「ホンツトにいい性格してるなあ！」

全く悪びれる様子もなく言う華音。

「それで？」

「えっ？」

唐突に訊く刻季に質問の意味がわからない華音は訊き返した。

「だから、何時に行けば良いの？」

「え……、来てくださるんですか？」

「行かなきゃしょうがないんですよ……」

つまらなそうに言う刻季。

「本当によろしいのですか？」

「いいよ」

「……えつと、放課後時間が空いていればすぐにでも……大丈夫で
しょうか？」

「わかった」

即決で返す刻季。

あまりにもあっけなく了承をもらい肩すかしをくらっていると

「あの……会長」

萌葱から話しかけられた。

「なんででしょうか？ 南雲さん」

「私も一緒にお邪魔しちゃダメですか？」

「南雲さんですか？」

「あつ、ダメならもちろんいいんですよ」

何か慌てて言いたいことをぼかすように言う萌葱に少し疑問を抱いたが、別段気にすることでもないのだ

「うちで良ければ、別によろしいですが……」

「ホントですか！？ ありがとうございますっ！」

突然手を握り喜びを表現する萌葱。

刻季も気になったので

「ねえ、なんで萌葱も？」

「な、なんだっていいでしょ！」

「でも師団どうしの接触は避けた方がいいんじゃないかな？」

「あつ……」

いくら同じ組織とはいえ礼儀を重んじるのが魔術師なので、あまりイレギュラーなことはしない方がいい。

その上南雲家と天原家となると、師団の中でも手を組まれると力を持ちすぎるため少しの接触でも気使いが必要だ。

「大丈夫ですよ、南雲さん。私達は当主でもなければ実際同じ生徒会に所属している身ですから、いまさら接触がどうか関係ないで

しょう」

「そ、そうですね！ ほらみなさい、刻季！」
鬼の首でも取ったように言う萌葱。

「あんなに入るの嫌がつてたくせに……」

「うるさいなっ！」

図星をつかれてつい手が出そうになる萌葱だったが、またしても刻季に届く前に華音によって止められた。

「刻季様への攻撃は許しません」

ただそれだけを告げる華音の迫力はおよそ女子高生に出せるそれでは無かった。

刻季はいじめっ子から母親に守ってもらっ子供のようにあまり気分が良くなかったが、痛みを伴わなかったので良しとした。

仁吾が萌葱に近づくとぼそつと

「家に行くなんて婚約者みたいで困ったんだろ」

にやけながら言った。

萌葱は顔を真っ赤にして今まで刻季を殴れなかった鬱憤をはらすように思い切り刻季への分も力を込めて仁吾を殴った。

「な、なんてことというのよ！ これは刻季の分もよ……」

「理不尽だ……」

確かに理不尽だったがタイミングが悪かった仁吾も悪い。

刻季はなんで仁吾が殴られたかわからなかったがとりあえず黙祷した。

「では放課後に教室までお迎えいたします。刻季様、南雲さん」
華音の声が生徒会室に響いた。

第09話 お問い合わせ（後書き）

ラブコメ書くのって楽しいです。

もっとバトル要素入れたいんですがなかなか入れるタイミングがなくて困っています。

第10話 奴隷く性奴隷（前書き）

タイトルは有って無いようなものなんで気にしないでください（笑）
今回は文字数はさほどではないですが結構書くの大変でした。

第10話 奴隷く性奴隷

授業の遅刻は『生徒会権限』とやらのおかげで不問となっていた。授業途中に帰ったためクラスメイトの疑惑の込められた眼は逃れられなかった。

しかしそれはまだ耐えられたのだが、竜也からの悪感情しか込められてない眼からは本気で逃れたかった。

……悪感情とは要するに、嫉妬などである。

まだ仲良くなる前の奇異の眼差しのほうがマシな気がしたのだが、仲良くなったことは仕方ないし、刻季自身も仲良くなって学園が楽しくなったのは事実だ。

これからの関係改善が大事だと刻季は前向きに捉えて、授業のある間は竜也の熱い眼差しを甘んじて受け入れていた。

やがて昼休み後の座っているだけでいいような退屈でしかない授業は全て終わり、放課後を知らせるチャイムが鳴った。

一年生はまだ魔術の実技を受けていない。

実技は学期ごとに2回ある筆記テストのうち、1回目のテストが終わり次第始まる。

何故そのような体系をとっているのかと聞かれれば簡単だ。

実技はチームで行うことになるからだ。

チーム——集団演習のことである。

魔術師は古来より家に集まる。

規模の小さな戦争や合戦と思えば近いのかもしれない。

もちろん個人で戦う場合もあるのだが、それは騎士道精神に基づいてとかなんとかで決闘があったりするだけでほとんどは集団対集団という形になる。

個人で戦うには戦略に限度がありすぎる。

たとえば身体を強化する魔術を使う魔術師がいたとする。

その魔術師は、チームにいればとても有効に働き、戦うことができるだろう。

強化魔法を使えば、最前線で相手と渡り合えるからだ。

フットボールでいえばフォワードとして攻めることも出来れば、相手の攻めも壁として止めることができる。

しかしその魔術師が一人で戦っているとする。

相手に遠距離戦が得意な魔術師が一人でもいれば、その時点で近づいて近距離戦にもちこむことが難しくなり、その時点ではほとんど一人で戦っている側が不利となる。

相手にダメージを与えることはおろか、相手に近づくことすら難しくなるのだ。

そのため、魔術師は集団戦を選ぶ。

もちろん、強化魔法しか使えない魔術師というのは少ないだろうが、魔術師にも得手・不得手が存在する上に、ただでさえ使える魔術が少ないのに得意魔術しか使わないような魔術師が大勢いる。

魔術師はいくつもの魔術の中で自分に合ったそれを見つけるため、その純度を高め、訓練して、その魔術を、自分の中に確立、することによって魔術師となる。

要するに魔術を覚えるのは誰にでも出来ることだが、魔術を使う、使いこなすには時間をかけにかけて形になるのだ。形にするのだ。

だから魔術師はその魔術を我が子に愛情を向けるように大切に
それだけ時間をかけて形になった魔術に愛着が沸くのだ。
そのためその魔術を大切に扱うのと同時に、その魔術に――依存す
る。

新しい魔術を覚えるより、魔術の強化・練成を選ぶ。

それにより得手・不得手の差がさらに拡がるという悪循環に陥る。

故に戦いの中で使う魔術は初手であり、切り札でもあるのだ。

その切り札すら簡単に手放せないため悪循環の一要因でもあるのだ
が……

閑話休題

集団戦を選ぶ理由は以上の通りだが、だからといって実技が何故遅
くなるのかと聞かれれば、クラスメイトに慣れる為というのが一番
の理由だ。

結局は、クラスメイトで仲良くなり魔術での争いを減らそうとし、
連携をうまく組めるようにし、そしてあわよくばチームを組んでく
れば儲けものといったところである。

さすがにそのような準備期間を与えられるのは一年生の内だけで二
年次からはクラスこそ変更になるが、一年次のチームをそのまま使
うことが大抵だ。

そうになると、刻季たち5人組みはほぼチーム化しているため学園に
とって一番の理想形であろう。

なんか今その理想が崩れそうで危ないが……、竜也も本音では仲違
いしたいわけではないと刻季もわかっている。なので問題ないはず
だ。

チャイムの音が鳴り終わると竜也が刻季の方に歩いてきた。

教室中の目が刻季と竜也に向かう。

「刻季、あのさ……」

「ん？」

ある程度何を言われるか予想のついた刻季だが聞くことに徹するとした。

その予想とは「お前、会長と付き合ってるのか？」が妥当なラインである。

奴隷だなんだは冗談と受け取るだろう。

「お前会長に『ピー』な服を着せて『ピー』で『ピー』に『ピー』なことさせた上に、『ピー』に『ピー』と『ピー』をいれて『ピー』なプレイしてるって本当か!？」

「……………」

もう色々大変なことになっている。

刻季の予想という壁を数十枚突き破っている感じだ。

「……………ナニソレ？」

「噂になってるぞ! 刻季と会長が夜な夜な『ピー』なことしてるって」

噂になるのは免れないと思った刻季だが、尾ひれがつきすぎている。

「なんなのその噂……?」

声にならない声を上げて訊く。

「噂だよ、噂! ま、俺が流したんだけどな!」

「はあああああ!？」

とんでもない噂を流してくれている。

完全に18禁の噂だ。クラスには年齢制限を越える生徒がいらない。

「な、なんで？」

「ん？ 妬ましいから」

理由を聞くとあっさり返ってきた。

「学園のアイドルであろう生徒会長にあんなことやこんなことをしやがって。ずるいぞ。俺にもその権利を分けてくれ！」

「渡せるならいくらでもあげるよ！」

切実な願いである。

「なに……？ 今度は『ピー』なプレイに飽きたからって捨てるのか……？」

「そんなことしてないからあー！」

「お前せめて責任はとれよ！ 会長を傷モノにしたくせに……」

「もうやめて……」

教室がざわつく。

もはやこの話を聞く以外の行為をしていない。

「釣った魚には餌をやらないうてか！？ 会長をあんなにしておいてよくも……」

「あんなってどんなだよ！」

「よくも性奴隷にしておいて……」

「してな……！」「はい、私こと天原華音は刻季様の性奴隷です」…

…」

いつのまにか華音がいた。

「どんだけタイミングいいんだあー！ー！」

「私は、いつも我が君のおそばに……」

「ほらやつぱり性奴隷じゃないか！」

言質をとったとばかりに大きく出る竜也。

「違う違う、竜也！ 華音、違うって言って」

「出来れば嫌です」

毅然として言う華音。

「なんで!？」

「面白そうだからです」

「お前えー！ー!!」

「ちなみに私、陸奥くんが話しかけるところからいました」

「最初っからじゃん!」

「だから出るタイミングを選んでました。どうでしたか？」

「絶妙なタイミングでしたね!!」

実に満足そうなしたり顔をしている。

「それでは面白かったところでそろそろ行きますか？ 南雲さん」

「は、はい!」

萌葱が刻季たちのもとへ来た。

「ちょ、ちよっと待って華音！ この誤解を……」

「さ、行きますよ。刻季様」

刻季の腕をぐいっとなつかんで引つ張る華音。

「か、華音！ 頼むからあ……」

刻季の声が徐々に小さく響いていった。

「華音は僕の事嫌いなのかな……?」

「いいえ、そのようなことはございませんよ。刻季様」

とぼと歩きながら呟くと天使のように慈愛の目で見つめてきた。

「それにしてはずいぶんなことしてくれたけど」

「それは愛情ゆえです」

「へ？」

情けない声を出す刻季。

「あれだけ言っておけば刻季様以外の方に尽くすことは出来なくなりますから安心ですね」

「安心できないよ！」

「性奴隷がいる高校生なんてそうそういないですよ」

「そのカテゴライズの中に僕を入れないで！」

ずいぶんな括りである。

そのなかに入る者が刻季以外いるのか気になるところだ。

いや刻季も入らないのか……？

「あの、会長！」

ふいに萌葱の声が聞こえる。

「なんですか？」

刻季と楽しく話していたつもりの華音は話の腰を折られて少量の虚しさを感じながら訊いた。

「家に刻季を呼んでどうするつもりですか？」

「どうするつもり、とは？」

「ホントに会長のお父様に会わせるだけですか？」

「えっ？」

驚いたのは刻季だ。

「師団の一家の長である会長のお父様が会いたいなどと簡単に仰らないと思うんです」

「なぜそう思うんでしょうか？」

「天原の家格は日本でもトップの一つですから『羽間』のような家の者に謁見を許すと思えないんです」

「それは南雲家も同じじゃないでしょうか？」

「南雲は自由な家風ですから。ですが天原は違いますよね？」

「……………」

伝統を重んじる家はどこか、と聞かれれば多くの家の名前が出てくるだろう。

魔術師にも宗教徒にも伝統を重んじる家は多数存在する。

というより、古い家はほとんどが伝統というものに縋っている。

南雲が異質なだけだ。

質問を、最も伝統を重んじる家はどこか、と変えると答えは自ずと絞られる。

いくつかの家名があがるが、間違いなく天原はその中に入るだろう。

そのような家の当主。

萌葱の言つとおり、たかだ『羽間』刻季に会おうと思うのか、と刻季は考える。

答えは否だ。

会うなど考えるはずもない。

刻季は『羽間』刻季だからだ。

羽間のしたことは表に出てきたわけではないが、師団の家が許すはずもない。

まして会うことなんて言うまでもなく拒否するだろう。

ならなぜなのか……？

「南雲さんの仰る通り、私は天原です。しかし父が会おうと申しましたのは真実です。羽間の家が何をしたのは、私の知るところで

はありませんし、ただ私は父の意向にそうことをするだけです」

「……ほんとですか？」

「はい、父が何を企んで、何を望んでいるのかはわかりませんが、会いたいと申してました。それから……」

そこで一度言葉を切る華音。

「兄も刻季様に会いたいと申しておりました」

「お兄さんも？」

「やですわ、刻季様。お義兄さんだなんて……、気が早いですね」
「いやそれはもういいから」

先程と同じ流れに呆れる刻季。

「でもなんで？」

「予想はつきますが内緒にしておきます」

「ええっ？」

少しだけ楽しそうに声を弾ませている。

「刻季、いいの？」

萌葱が声をひそめて刻季に聞いたです。

「え？ なにが？」

警戒心の無い声で聞き返す。

「行ったらあんた何されるかわかんないわよ」

「んー？ 大丈夫じゃないかな？」

「あんたねえ……。知らないからね」

萌葱の忠告は尤もなことだったが、あまり気にした様子もなく安心してきっている。

「それに、^{みお}櫻桜さんに知られたらどうするのよ？」

「あゝっ！」

突然声を張り上げる刻季に華音は怪訝な表情を少しだけ浮かべたが、すぐに無表情に戻った。

「あんた、今までのことも知られたら、大変なことになるんじゃない？ あの人あんたとあたしが少し一緒に買い物しただけで騒いだくらいだから、今回はどうなるのかしら。澪桜さん嫉妬深いんだから……」

「どうしよう……」

澪桜との事をいきなり思い出して、その思い出の密度の濃さに刻季は眩暈した。

「まあ自分のことなんだからなんとかしなさいね」
まるで最終通告でもするように言う萌葱。

今言わないと断れないよ、と目は告げている。

今からでも断れば遅くないか？

あの人のことだから許しはしないだろうが、断る姿勢を見せたから減刑してくれるか？

いやそもそも断って華音は帰してくれるのか？

等々、刻季の頭の中を駆け巡る。

やはり断ろう、そう結論づけた刻季に非情にも時間切れのベルが鳴った。

「着きました」

「はやっ！」

まだ歩き始めて5分も経っていない。
寮よりも近い家とは何なのだろう。

「どうかなさいましたか？」

「い、いや……」

華音が見ている方を見ると、いつも寮から学園の校舎まで行くときに通る道沿いにあった大きな木造の家があった。というか大きすぎだろ、と思わず眩きが洩れる刻季。

一言で伝えると、荘厳だった。

それ以上にうまく伝えることのできないような古風な家。さすがの天原だ。

華音が家の方に歩き出すと仕方なくついていくような形で、刻季と萌葱も一緒になった。

家に入ると、まず長い廊下だった。

一番先が見えそうにないくらいの長さだ。

そして給仕の人だろうか、華音の帰宅に刻季たちの方も見ながら挨拶した。

「お帰りなさいませ、お嬢様。いらっしやませ。旦那様でしたら、お部屋にいらっしやいます」

「ただいま。ええ、わかりました。」

このようなのは刻季も萌葱の家で見ているがどうも馴れそうになかったのでとりあえず会釈をしておく。

萌葱はしっかりと挨拶をかえしているようだった。

板張りの廊下を華音を先頭に歩いていく。

途方もない距離だった。

きっと華音は一番奥の部屋を目指しているのだろう。

1分くらい早歩きをしてようやく奥の部屋の戸の前に着く。

コンコンと華音が戸を叩きながら

「ただいまかえりました。華音です」

「開けなさい」

中から厳しそうな渋い声が返ってきた。

はい、とだけ華音がかえし戸を開いた。

中はいかにも古く大きな家の一室といった様子の部屋だった。

生徒会室の荘厳さとは全く違う形の威厳をもっている、そんな部屋だ。

はつきり言つて刻季には場違いだと思えなかった。

それでも仕方なしに部屋の中ほどもで華音に連れられて向かう。

社長が使うような長机の奥で椅子に座っている壮年の男性とその横に仕えているように立っている青年がいた。

きっと華音の父と兄だろう、と想像する刻季。

刻季と目があった青年のほうは刻季に向かって笑みを送ってくる。

愛想よく刻季もかえすと壮年の男性が

「手前が天原の当主だ。卿が羽間か？」

自分たちの身分を位置付けるようにいうような声だった。

自分が『天原』でお前が『羽間』、自分が『天原』でお前が『羽間』
とでもいうように。

刻季はもともと歓迎されると思っていたわけではないが、結局萌葱の予想通りあまり歓迎されたものじゃなかった招待に心の中で暗雲が立ち込めてきた。

第10話 奴隷く性奴隷（後書き）

澪桜はそう遠くない日に出します。

どんな関係なのかは楽しみにしてくれるとありがたいです。

あと羽間家の話もいずれ出します。

全部の『魔法学園』を『魔術学園』に直しました。

見切り発車で投稿した今作ですから、最初からやりなおしたいです。でもキャラに愛着わいちゃってそれもかなわないのでマイナーチェンジ？しました。

あんまりマイナーじゃないかも……

第11話 天原父兄（前書き）

遅れてすいません

旅行行って、でも旅先で更新しようとおもったら思いっきり風を
引きまして……

実は現在も真っ只中ですので駄文が更に駄文になっていますが、お
許してください

第11話 天原父兄

「手前が天原の当主だ。卿が羽間か？」

なんてことはない華音の父親から放たれた最初の言葉は、羽間刻季にとって重たいものだった。

天原家現当主である天原音彦は萌葱おとしこの父親のように師団の要職にこそついていないものの、天原という家格の高い家の当主とあるだけあって日本では知らない人はいないだろうし、世界でも魔術マジックの世界ではやはり著名な人の一人だ。

本来なら、刻季が直接相對することの出来ない人物で碓氷家の跡取りである仁吾もそうそう会えないだろう。まして、刻季は羽間の一員である。望んだところで会うことは叶わないだろう。

それがこんな形で実現した。

羽間と天原が会うなど一昔前なら考えられないことだ。

尤も刻季はそんなこと望んでもいなかったのだがそんなことを言っても仕様がなない。

今日の前にいるのだ。

地位の差を改めて問うような音彦の発言に苛立ちを感じるが、それを表に出すこともできないので取り繕った。

「はい、初めまして。羽間刻季と申します」

「うむ」

刻季の挨拶に鷹揚に頷く音彦の眼は明らかに値踏みをするようなそれだった。

「手前は面倒なものと、前置きが長いものは苦手だな。早速だが話を始めさせてもらおう」

「はい」

「卿と華音のことはすでに華音から聞いている」

果たして華音がどんな風に伝えているかわからないが……

「結論から話すと手前はその関係を認めていない」

「父上！」

華音が珍しく声を大きくする。

これでなんとなくだが二人の関係性を理解する刻季。

「華音は手前が18年間手塩にかけて大切に育てた娘だ。それをただか16の若造にもっていかれるなど、そう簡単に納得できるものではないだろう」

「……………」

「主従の関係なんて過去の時代の遺物でしかない。もちろん天原にも手前にも従者というものがいるが、強制的に結んだ関係ではない……………」

「卿は過去にやっていたという前時代の先例を利用し華音との契約を結んだ。その先例とは文字通り現代では行われていないことだ。決闘をして勝利をすることなんて華音の調子しだいによくあることではないのか？」

「そんなことはありません。現に私は身内以外には負けたことがないことを父上もご存じでしょう」

「弱点をしっかりとつけばわからないだろう。確かに華音、卿は強いが、強いが故に慢心しがちになることもあるに違いない」

「いえ父上、確かに刻季様と決闘を始める時油断していたのは事実です。ですが最終的には力を出し切り、そして完敗でした」

「有り得ない。卿は12師団の一員なのだぞ。それを『羽間』に……」

「羽間であろうとなんだろうと私には関係ありません。私がお仕えするのは、刻季様であって羽間ではありませんから」

完全に刻季をおいて論議しあう華音と音彦。

「それに私はただ負けたからといってお仕えするほど甘いつもりはございません。そこまで慣習に忠実でもありません」

「では何故だ？」

「刻季様についていけばいいと私の直感が申したのです」

そんなインスピレーションで……と刻季は思ったが白熱している二人の間に入ることが出来そうになかった。

「直感ごときでそのような事を信じるのか？」

「はい。実際刻季様はそれに足る存在だと私は思います」
自信満々に答える華音。

一体刻季の何をそんなに気に入ったのだろうか。

「……わかった。ひとまず卿の直感とやらを置いておく。卿が聡明であるのは手前が一番わかっていゝつもりだ。信じることにした理由もあるのだろう」

「では父上……」

「だがその若造のことを認めたわけではない」
音彦が言い放つ。

「羽間のような家系の者に仕えるなど、天原では許されないことだ。それに卿にはいくつもの婚姻話もあがっている。羽間と関わっていると知ればどうなるかなど火を見るより明らかだろう」

「私は刻季様以外の方と結婚するつもりはございません」

刻季としては華音と結婚するつもりはない。

「卿は結婚まで考えているのか……？」
よろけそうになりながら音彦は訊いた。

「そこまでおこがましいことは考えていませんが、結婚すればより綿密に刻季様にお世話させていただけると思っただけです。どちらにせよ、私は結婚など認めていません」
毅然として言い切る。

刻季はどこか他人事のように傍観していたが横から

「あんた、結婚ってなに？」

萌葱がこっそりと刻季に近づいて聞いた。

「いや、知らない……」

実際刻季は華音が仕えることも認めていない上、プロポーズなんかした覚えがない。

「ふうん……。まあいいわ」

納得したのかは定かではないが、とりあえず話を打ち切る萌葱。

そうこうしているうちにも華音と音彦の話は進んでいく。

「卿は師団なのだぞ。継ぐかどうかはわからないがそのような勝手が許されると思っているのか？」

「それを勝手だと私は思っておりません」

「師団だからといい、政略結婚こそ古いことだと思っています。それに第一兄上がいることですし、天原は安泰でしょう」

「だからといって、卿がその羽間に仕えていい理由にはならないだろう」

「そうですが、そうすることを否定する理由はありません」

どちらも一步も引かない状態が続く。

ふいに音彦が

「羽間」

刻季を呼ぶ。

今まで忘れられていたと思っていた刻季は突然声をかけられて驚く。

「は、はい」

「卿のことを手前は認められないがどうやら娘は卿の事を信用しているらしい。このまま話していても決着することはないだろう」

「え、ええ、そうみたいです」

「だからな。出来れば卿のことを信用することになったその時の状況を再現してほしいのだ」

「はあ……」

曖昧に頷く刻季。

「わかるな？」

何がわかるな、だろうか？

刻季は何もわかっていないようだが……

「要するに、もう一度華音と決闘してほしいのだ」

「へ？」

情けない声を出す。

「もう一度決闘をすれば、少しは華音も意見を変えるだろう。それが手前の意見が変わるだろう。だから羽間、卿と華音は決闘をしろ」
「ちよ、ちよっと待ってください……」

別に刻季は華音に仕えてほしいなど思ったこともなければ認めてもいない、そう言おうとした。

がその前に華音が

「父上。私は仕える者として刻季様と拳を交えることをすでに禁じています。ですから決闘をすることは私と刻季様では出来ません」
刻季としては結果的に決闘を避けられそうなので華音の意見に乗ることにした。

もう流石に女性を殴るのは勘弁してほしい、との刻季の切実な願いだ。

「そうです。僕と華音ではもう決闘は出来ません」

「それでは、どうすればいいのだ？ 手前が認めることはもう出来なくなるのだぞ」

もちろん、認めてほしいなど刻季は微塵も思っていない。

むしろ刻季も認めていない。

「卿たちのことを認めなければ、手前はこれから華音の婚姻話を勝手に進めて、華音を当分家から出さないようにするつもりだ」

「父上！」

焦って華音が諫めようと声を張る。

そこで今まで傍観していた華音の兄らしき人がふいに口を開いた。

「華音と決闘できないなら、僕としようか？」

「兄上？」

「音弥？」

二人の声がかぶる。

「華音としては、仕えているその羽間君に不敬を働くことは出来ないってことでしょ？ なら僕ならなんの問題もなく決闘できるよ」
飄々とした様子で言う音弥。

「確かに卿なら問題もなく戦うことができるな。そうだろ華音」

「え、ええ。出来れば兄上にも刻季様と戦ってほしくないとはおもっています。がこうなつては仕方ないでしょう」

刻季にはどんな外堀をうめられている音が聞こえた。

早く止めないとまた、と数日でまきこまれ体質に認定できるほどに成長？した刻季は危機感を覚えた。

「あ、あの！」

「ん？ 話なら後で聞くからとりあえず庭にでも向かおう」
先程まで刻季から少し離れていた音弥がいつのまにか刻季の手をとっていた。

「さあ早く早く！」

「ちよつと！ お兄さん！？」

「お義兄さんなんて気が早いな」

「あんたもそれかよ！」

華音と同じボケをかます音弥。

「全く刻季様つたら」

顔を赤らめた歩く無表情の華音はこの前と同じ表情をしている。

「はあー……。全く刻季にも同情出来るわ……」

萌葱の声を最後に一行は庭に向かった。

第11話 天原父兄（後書き）

読み返してみても短いうえに酷いですが勘弁してください。

ちよつと重たい話を書こう書こうと努力しようとはするのですが、
どうにも書いてるうちに鬱になって書きなおしてしまいます。

次回は華音兄こと音弥との戦いからです。

しかしそんなにバトルパートっぽくなく終わるかもしれません（笑）

第12話 雷神の鉄槌

庭へと向かう廊下を音弥と音彦の両名を先頭に歩く一行。

刻季は萌葱・華音を横にしながら憂鬱な気を漂わせてとぼとぼ後ろをついていく。

右にいる萌葱が心配そうに何度も顔を伺うが、刻季はその視線に気づくことすらなかった。

ものすごく嫌そうにゆっくりと歩く刻季はあることに気がついた。これ負ければ全てから解放されるのではないかと

負ければ華音も愛想つかす上、華音の父親も完全に拒絶するはずだ。そうすればこれからは学園生活をほそぼそと過ごすことができるし、卒業したら実家に帰って死ぬまでゆっくりと暮らすことになるだろう。

元々望んでいなかった学園への入学だったから、そうなることへの不満も文句もない。

そう思い立ったら突然、それが最善の答えだとどんどん思えてきた刻季は、その結果を導くために能力も使わずにただ負けようと試みることにした。

……が、

「刻季様、もし簡単に負けでもしたら色々嘘偽りを込めて学園中に噂を流してしまいます。生徒会長である私発信で」

まるで刻季の思考が読めるがごとく左にいる華音が言い放った。その言葉が寸分の狂いなく刻季の思考にぶっ刺さる。

「具体的にいえば、私を性奴隷として散々甚振った挙句、まるで責任をとるようすもなく捨てた、とかですかね」

「華音っ？」

そんなことされては学園に通うことすらままならなくなる。

学園に未練など微塵もないが卒業せずに実家に帰ることはできないだろう。

「ちなみに、そのような噂を流した後も影では刻季様に仕えることをやめるなどあり得ませんので」

逃げ道をどんどんふさいでくる華音。というかすでに逃げ道がもうない。

横では華音の言葉に萌葱がため息をついている。

災難ね、と言っているようだった。

「あの〜できれば、そういう噂はちょっとやめてほしいかな〜なんて」

「もちろん、刻季様が簡単に負けることを選ばなければそんなことするわけじゃない不是吗？。それも刻季様に忠誠を尽くしている従者兼メイド兼奴隷の愛情とお受け取りください」

とんでもない愛情表現である。

とてもではないが恋愛経験のない刻季に処理できる案件ではないことは確かだろう。

恋愛経験の深い人でも対処出来るようなものではないのかもしれないが……。

「……わかったよ。やるだけやるよ」

「それはありがとうございます」

あきらめたように言う刻季に深々とお辞儀で返す華音。

「そのかわり、これ以上面倒なこと起こさないようにしてくれるかな？」

「善処いたします。……ですが刻季様自身が引き込まれる問題の数がこれから多くなつていく気がいたしますので、完璧にはいかないでしょう」

問題を起こす第一人者から巻き込まれ体質の認定をされた。刻季の切実なる願いはどこにも届きそうではない。

面倒を無くすことは諦めて、数を減らしたり、対処するスピードを上げることに決めた刻季だった。

「さあ、そろそろ始めなさい」

凜とした声で音彦が告げた。

場所は天原家の庭である。

着いた刻季は、いやいや庭つて言つたよね！？と内心でかなり驚いていた。

それもそのはず、連れてこられたところは手入れのしてある庭だったのだが、その奥には手入れの施しようのないほどの原生林というものがあった。

見上げると屋久島の縄文杉か！という具合の大きさの木がそびえていた。

要するにここは庭であつて庭で無い場所なのだろう

実家の庭と比べてみるとここは未開のジャングルだった。

中には様々な動物——猿、猪、熊、ターザンまでいそうな立派な原生林だ。

師団の家はみんなこうなのか、と思ったが南雲家は違った。
南雲には原生林はなかったはずだ。

その証拠に、萌葱も驚きの顔を隠さずにあらわにしている。

萌葱がこの家に来たことはあるだろうが、まさかここまでの庭だとは思いつかなかっただろう。

原生林があることが師団にとって当たり前なのか、どうかはこの時の刻季には知る由もなかった。

呆然としている刻季へ音弥が言った。

「そろそろ始めてもいい？」

「あ、はい」

ボーっとジャングルを眺めていたことにようやく気付き音弥と向かい合った。

「刻季様、頑張ってください」

実の娘は、兄ではなく主を応援している。

それに音弥と音彦の手前返事をかえすことも出来ず、ただ華音にむかって苦笑を浮かべるだけで終わった。

「二人ともいいか？」

少しピリピリしたようすの音彦が確認をとると、刻季と音弥は頷いた。

「では、はじめ！」

開始の合図とともに音弥が呪文である言霊を唱える。

「天空神《Amateras》よ。我は汝の使者を名乗る者也」

その呪文が唱えられたと同時に雷が刻季へと突き刺さるように撃たれた。

轟音が鳴り響くが、その雷は刻季の元へ届くことは叶わなくただ魔力の吸収がされるだけだった。

魔法を使う際に呪文を唱える必要はない。

それは体内で魔力を形成して魔法へと変えるからだ。

尤も産まれたときからそのような技術が使えるわけではなく、魔術師や宗教徒になるためにまず最初に魔力の形成の訓練をする。

魔術師学校や宗教徒学校で一番初めに教わることがそれになる。

そして訓練をして初めて魔術師や宗教徒を名乗ることが出来るのだ。

それなら何故音弥が呪文を唱えたのかというと、単純に魔術の威力が上がるからだ。

呪文を唱えることによって魔術の純度が上がり、それが威力にも影響する。

それゆえに、魔法からは呪文を唱えるという行為が消えることなく今も残っているのだ。

しかし決闘では通常呪文使うことが滅多にない。

1対1となると短期決戦が主流だからである。

遠距離魔術の場合はそれに該当しない内のひとつとなるが

閑話休題

ともあれ、音弥の詠唱した呪文が刻季に届くことなく消滅した。その事実を前にして音弥は少し驚きの表情を浮かべている。

刻季が一步近づくともう一発雷を放ってきた。

寄らせると危ないことになるかと察知したのだろう。

しかしそれもやはり刻季に届かずに消える。

実は先程から使っているこの魔術は天原家の継承魔術の一つである。単純に雷を撃つことなら、ただの魔術師でも使うことが出来る。

しかし天原の魔術は天候を司る魔術——天空魔術だ。

天を司るといふ魔術は天原の名にふさわしく、この魔術があつたからこそ天原は師団の一角を占めているといえるだろう。

音弥が放っている雷は一度雷雲を精製し、そこから雷を発している。作ろうと思えば、上空を覆う程の雷雲の精製ができるだろうが、決闘で使用する必要はない。

一人を仕留めるために巨大な雷を落とす理由がないからだ。

刻季が一步、まと一步と進むと音弥は表情を徐々に曇らせながら、雷をいくつも放っていく。

音弥から放たれて刻季に到達すると魔術の消滅とともに轟音が何度も鳴り響く。

結局それらは全て刻季の魔力へと変化していつている。

雷一発ごとの魔力の量が尋常ではない。そのことからかなりの実力者だろうと刻季は推測した。

華音の兄というだけでほぼ実力者であるのはほぼ確実なのだが、

それでも魔力を使用する以上刻季の相手ではない。

魔術師など刻季の相手にもならない。

放たれた何回もの雷は全て刻季に吸収されている。

音弥の位置からは刻季の少し手前で突然消えているようにしか見えない。

一発が人を必ず気絶させるであろう威力なものにも関わらず、防御魔術の一つも張らないでいる目の前の少年に届くことなくただ魔術の

消滅を目にする。

その事実が音弥を本気にさせた。

「ごめん、やっぱり少し悔ってたよ。魔術なしでここまでやれるって、何をしているのかはさっぱり分からないけど華音に勝ったって言うのは本当なんだね」

「ええ、まあ、そうですね……」

華音なんかは嬉しそうにうんうんと首を振っている。

「それじゃ、わかってもらえたようなのでもう終わりにしませんか？」

「いやだよ」

提案するとすぐに拒否する音弥。

「せっかくだから最後までやりたいし、君の事も見極めたいし、今後の事も今決められるかもしれないからね」

「今後の事……？」

「まあ、終わったら話すよ。ほぼ僕の中で確定している事だけだよ」
「……？」

言葉を濁す音弥に何が言いたいのかまるでわからないといった表情を刻季はしている。

「それじゃ、いくよ」

どこことなく飄々としていた音弥は一度瞬きすると、真剣そのものといった表情を浮かべて隙がまったく見えなくなった。

「雷神《Thor》よ、我は汝の使者を名乗る者也」

「我に神の力を貸し給え、我に神の魂を見せ給え。汝の力は地に裁

きの雷を落とし、汝の魂は民に信仰の雷を落とす。力を貸し給え、魂を見せ給え、さすれば現は汝の御世となるだろう」
呪文を高らかに上げると上空一面に雷雲が立ち込め、忽ち夜になったかのように暗くなる。

ゴロゴロと白い龍がうごめいているように見える雷雲は辺りが暗いため相対的に輝いている。

「どう？　これが僕の力だ」

「こんな力……、僕なんかに使っても良いんですか？」

「力は使わなきゃ意味がないよ。今は隠しとしても後悔するだけだと思っしね。親父も何も言わないし良いってことでしょ」

音彦は先程から表情を変えずに状況を眺めている。

「さあ、構えて。これはそう簡単に破れるものじゃないからね」

刻季は念のため魔力の吸収範囲を広げる。

一筋でも雷が当たればその瞬間から意識がなくなるだろう。

「神よ、蠢く雷を落とし給え」

そう言霊を上げ終える、すると一段と上空では龍の咆哮さながらの音を鳴らす。

ピカッと光った瞬間、刻季の元へ一直線で雷が落とされる。

雷が刻季の元へ届くとそこにいる全ての者を対象とするような雷龍の咆哮が耳を劈き、視界を白ませた。

刻季に撃たれた雷はどこかにいるだろう雷神が裁きの鉄槌をくだしている様子に見えた。

ただその裁きの鉄槌も刻季には裁きへとならなかった。

刻季は裁かれる対象でなく裁く審判の者だったのだ。

視界と聴覚が回復し、全員は刻季のほうをみると、そこには耳をおさえて片目をつぶって平然としている姿だった。

すこしの光に取り囲まれてまるで天使に囲まれた神のように佇む刻季の姿は一層華音の精神に逃れられない呪縛の鎖で縛りつけた。前回の決闘でも植え付けられたそれと今回の違いは、対象が華音だけか違うのかといったところだった。

そう。そこにいる皆が刻季の姿に見蕩れていた。神の御姿を見蕩れていた。

「すごい音だったなあ。うわっ！ まだキンキンしてるっ」
そんな誰も言葉を発せずに誰も動けないという状況を動かしたのは、他でもない刻季だった。

緊張感のかけらもない刻季の言葉に一同が気づいたようにハッとした。

「まだ眩しいし……。もっと手加減してくれてもいいのに……」
ブツブツ言っている刻季に呆れを通り越して少し情けなくなってくる華音だったが、それすらも慈愛から来る感情だったのだろう。

「勝者、羽間刻季」

音彦が突然発した言葉は刻季の耳を疑うものだった。

「えっ？」

ふいに対戦相手から目を外す。

そこで見る萌葱と華音の納得しているような表情はさらに混乱した。

「あの……、まだ終わって……ません……よね……？」

「いや終わりだ」

一言でぶった切る音彦になにがなんだかさっぱりわかっていない刻

季は音弥を見た。

「僕の負けだよ。もう魔力も尽きちゃったしさ」

方をすくめて言う音弥は、負けたというのにまるで悔しそうでなく、むしろ清々しさを露わにしていた。

「そうですか……？」

「ああ」

なんだか拍子抜けする決着のつき方だった。

力の半分も使わずに勝ってしまったのだ、それも当然だろう。

萌葱と華音が刻季の元へとやってくる。

「お疲れ。大丈夫だった？」

「うん。まだ耳がキーンとしてるけど……」

「あのね。あれをくらって『耳がキーンとしてる』で済むってことは大丈夫ってことなの」

まったく規格外なんだから、と華音が呟く。

「我が君、刻季様、あの……」

華音が顔を赤くしてもじもじしている。

今までの華音とは似ても似つかない表情と行動だ。

そう刻季と変わらない身長的女性がこのような格好をしていると少し変な気分を感じる刻季だった。

「格好良かったですっ」

「え？ あ、ああ、ありがとう」

とろんと心酔しているような目で言う華音に刻季は困惑しながら返した。

萌葱がそれをみて、まさか本気で惚れちゃったの……？と怨念染み

た様子で呟いているがそれが刻季に届くことは無かった。

第12話 雷神の鉄槌（後書き）

風邪が治って書くぞ！と意気込んでいたらプロットが何故か全消去されてて、そこから書き直して遅れてしまいました。

久しぶりのバトルパートいかがでしたか？

楽しんでいただけたら幸いです。

やっぱり苦手だ……

第13話 新結社

決闘明けて今、談話室と呼ばれる部屋に刻季と華音と音弥はいた。ここだけは洋室で、襖を開けてみたらモダンな部屋があつてびっくりしてしまった。

ちなみに萌葱は現在音弥・華音の父親である音彦のもとへいる。

刻季は師団の家同士なにかあるのだろつと大して気にしていなかった。

黒い革のソファ―に音弥を正面に、華音を横に控えながら少々堅苦しい面持ちですわっている。

あまりくつろげていない刻季を見て、華音は安心させるように横に座つたのだが、それは逆効果としか言えないようだった。

なぜならソファ―が小さいのだ。

1人用とまでは言わないが1・5人用というような大きさで、もし体の大きな仁吾が座ろうものなら仁吾1人で埋まってしまうような大きさなのだが。

幸か不幸か、華音は言わずもがなだが、男としては細身の刻季と2人では座れてしまうのだ。

誰が見ても（特に竜也など）幸せにしか思えない状況だが、この場で甘受できるほど刻季も心が強くなり、ただ表情を堅くするばかりだった。

刻季の両サイドにも同じソファ―があるのに、華音はそこから動くせす、むしろ刻季へ積極的に寄り添っている。

妹の見たこともない積極的な行動に音弥は苦笑しながら話を切り出

した。

元々話があると誘ったのは音弥なのだ。

「華音ったらそんなに羽間君のことが気に入ったの？」

まさかこんな話をするために呼んだはずではないだろうが、場を和ませるためにこの話を選択したんだと刻季は予想した。

ただ刻季としてはその話題で和むことはないだろうと確信しているが……

「はい、一生お仕えしたい方だと思っています」
ほら……

顔を赤らめて言う華音の魅力は、それはそれは素晴らしいものだったが、刻季にとっては心臓に悪いものだった。

藪をつついてもないのに、勝手につかれて蛇が出てきた状態だ。

先程の決闘が終わってから、華音の様子が少し変わっていた。

知り合って2日程度で何もわかっていないのかもしれないが、どことなくよそよそしさを感じていた。

なんだか掴める距離にいるのだが、掴もうとすると虚空を握るようなもどかしさがそこにはあった。

今も隣に居るのに少し恥ずかしがっているような様子だ。

いつもなら平然と無表情を浮かべているだけの状況なのだが、今は顔を赤らめて刻季のことをチラチラ見ては目が合うと避けるといった行動を繰り返している。

恥ずかしいならこんな近くにいないればいいのと思うが、華音はそこから動く気配すら見せようとしない。

また一度華音のほうを見ると華音もやはり刻季を見ていたようで目が合うが、すぐさま視線をそらしてしまう。

黒髪がはだけて見える横顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

鈍い刻季にも察する事が出来た。
照れているのだ、ただ単純に。

華音のあまり見ることの出来なような表情を見て刻季は思った。

（可愛いじゃないかーっ！！）

この厄介事ばかりを選んでもつてくるような女性は外見的なスペックは完璧なので、それでこの仕草を持つことは反則的な可愛さだった。

（なに？ これ？ 本当に華音だよね！？ やばいやばい！ なにこの可愛い生物？ これで甘えられたら何でも受け入れそうだよ！
なんか華音じゃないみたいだ）

所々に『華音別人説』を取り入れていて、聞かれたら怖い笑みを浮かべて『わかってますね？』と目だけは笑わずに言っつきそうな刻季の内心だったが、これほど動揺するほど華音が魅力的なのだ。

危なく刻季は認めていないが主従の関係を越えたイケナイ関係へと発展しそうな状況だったが、刻季は未成年だったし、そうでなくても華音に手を出したらどうなるかぐらい刻季にもわかっていた。
ギリギリのところで理性が踏ん張り耐えた刻季は、可愛すぎて美すぎる生物からようやくと目を離すと音弥に訊いた。

「……そういえば、なにかお話があったのではないですか？」

「羽間君も華音に対してみたいに敬語使わなくていいよ」

「いや、それは……」

自分より2歳上の相手ですら渋りに渋ってようやく敬語でなくなつたのに5歳近く上だろうと見える華音の兄に対してまで出来るほど刻季は礼儀を軽んじる人ではないので固辞した。

「ま、いいか。それは今度で。それで話というのはね、羽間君」
「はい、なんでしよう」

少し嫌な予感がしたが、ここ数日で何回も感じている為どこかその感覚に対して鈍くなっていたためそこまで気にしていなかった。気にしていたところで、嫌な予感というものは外れるモノではないことを、この巻き込まれ体質君は気付いてないのだろう。

「僕の作る魔術結社の頭首をやってほしいんだ」
「魔術結社？」

魔術結社で有名なところは、師団、や、旅団、といったところだろう。

「そう、結社を結成しようと思っているんだ。そのトップを羽間君に頼みたいんだ」

「いやいやいやいや！ そんな重大な役職なんて、一高校生にやらせるもんじゃないですって！」

軽く言う音弥に刻季が憤慨した様子で言う。

「大丈夫だよ。結社も若い人達だけで結成する腹積もりだから」

「だからといってトップが高校生じゃ頼りないにも程がありますよっ。普通にお兄さんがやればいいじゃないですか」

「うーん、まあ僕がやってもいいんだけどね。それじゃ師団と何も変わらなくなってしまうんだよ」

「……どういことですか？」

音弥の言う意味がよくわからない刻季は訊いた。
すると横から答えが返ってきた。

「兄上の作る魔術結社は師団と旅団の家の若い人達で作ろうとおもっているそうなのです」

「——っ!？」

華音の答えに驚愕が顔に浮かぶ。

師団と旅団に所属する家は表面上では友好的に接している家がほとんどだが、過去の結成当時はいざしらず、現在は家ごとに牽制し合い、結社ごとが牽制し合っているというのが、日本魔術界の上部トップ——師団・旅団の現状だ。
バランス

そんな家の若者を集めて結成するということは、そのバランスが瓦解することを意味している。

いずれ日本魔術界のトップに属する人たちが集まる結社ということになるのだ。

そんな結社は師団と旅団からまず認められないし、国からも認められないだろう。

ましてや、その頭首が刻季などあり得ない。

刻季は『羽間』であって、『羽間』は現在『フリゲイト20旅団』ではない。

『羽間』とは即ち裏切り者也。

……これが羽間の家の過去である以上、刻季が頭首を務めることなど許された行為ではない。

羽間にとっても師団にとっても、もちろん新しい結社にとっても……。

「やっぱりできません……。とてもありがたいお誘いですが……」
刻季自身やりたくないという気持ちは思いのほか薄かった。しかしやれない、出来ないという意味が強すぎた。

『羽間』には縛りがあり過ぎた。

「羽間家のこと気にしているの？」

音弥が刻季の一番深いところを突いてくる。

その質問に一気に燃え上がった。

「気にしないわけありません。もちろん気にしています。今は『羽間』がどうだ、なんて言う人はいませんし、第一表向きでは『羽間』なんてただの没落した家の一つでしかありません。それに萌葱も南雲家も僕や羽間に良くしてくれてます」

一呼吸を入れる。

「それでもやはり僕は産まれた時から『羽間』なんです。曾祖父と同じ家だというだけで産まれた瞬間から裏切り者のレッテルを貼られているんです。そんな『羽間』なんかが結社のトップなんて認められるわけありませんし、ともに務められると思いません」
途中途中苦しそうになりながら言い切った。

言いきったところで久しぶりに感情を発露してすっきりした気持ちもあったが、無関係な人にここまで話してしまったという後悔が大きくなっていき次第に刻季は肩を落としていった。

後悔に崩れているとふいに横から抱きしめられる感触があった。

そちらを見るといつも無表情な華音がにこやかに、まるで聖母のように刻季に微笑みかけている。

優しい笑顔だ。なんだかその笑顔だけで暖かい気持ちになり、いつもこの笑顔を見せてくれればいいのにと華音に失礼と思うが刻季は少し釈然としなかったが、それでも暖かくなっていく気持ちは止まらずに華音の体温がどんどんと刻季の方へと流れていった。

……体温？

そこでようやく自分の体たらくに気付いた。

（僕抱きつかれてるじゃん！）

危うくこのまま寄り添ってしまおうかと思っていた刻季は急激に恥ずかしくなっていき、華音に呼びかけた。

「……あ、あのさ、華音」

「なんでしょうか？ 刻季様」

「あの、もう大丈夫だから、そろそろ離してくれないかな？」

「嫌ですね」

無表情に戻して華音が拒否した。

「でもさ、ほらお兄さんもいることだし……」

「あんなの、刻季様に抱きつくことに比べたらいてもいなくても同じようなものです」

「いや、それはちよつと……」

実の兄に対してだいが失礼なことを言ってる華音に音弥は苦笑を浮かべていたが、それでもどこことなく楽しそうだった。

「とりあえず、話をもどしていいかな？」

「あ、はいっ。ほら華音？」

「このまま続けてください」

「いや、それは……」

「まあいいか」

音弥が諦めて話をしようとするが、あまり良くないと切実に刻季は思う。

「それでね、新結社の暫定メンバーは一応羽間だなんて言わないから別に羽間君でも大丈夫だから。その上頭首の決定権は僕にあるって承認されてるから別に僕が羽間君って言ったら皆反対も出ないんだ」

今刻季が出来ないと否定していた問題をその言葉だけで覆してしま

った。

「それでも、決定権があるっていつてもやっぱりみんなから承認してもらわなきゃ話にならないから自分より強い人って決めていたんだよ。でもそんな若くて強い人なんてそうそういないし……。そんなことを思っていたら華音の主人が現れたって聞いて、それは華音に勝ったから主従を結んだって。……決定権を委ねられてすぐにそんな話をタイミングよく聞いたから、自分の中では決定づけていたんだ」

矢継ぎ早に音弥が言った。

そんな勝手な……とは刻季は何故か思わなかった。思えなかった。刻季の知らないところで勝手に決定していたとしても……

「そんで戦ってみたら、完膚なきまでに負けちゃって、しかも魔術も使わずに……。そんなことになったらもうこの人しかない！と思うえないっしょ？」

「それは……どうでしょうか」

「僕はそう思ったんだ。だから君に頭首をやってほしい」
「……………」

刻季は首を縦に振れなかった。

やってもいいかな程度には思っているものの、それを決定づける事象がないのだ。

「私も刻季様ならふさわしいと思います」

横から華音が後押ししてくる。いまだに抱きつきながら刻季至上主義であろう華音のいうことだからあまり信用出来ないというわけではないが、自分がそんな大役をやっていいのか？という想いが溢れてくる。

正直、華音が見初めるほどの人物ではないと自身では思っているの

だ。

それなのに、それゆえに、自分が将来有望な師団と旅団の若者をまとめることが出来るわけないと思うのは当然のことだった。

頭首をやるだけなら誰でもできるだろう、ただ立派に務めるとなつてくると話が異なる。

刻季の言いたいことはそういうことだった。

それでもその権力が惜しかった。

『羽間』の家格を戻すためになるのかも、と少しでも思ってしまった。

現在実家にいる姉のためにやるべきなのか、とってしまった。

決定は現在、自分自身に委ねられている。

もし了承すれば、その瞬間から『羽間』の家名はぐつと知られることになるだろう。

もし辞退すれば、手に入れられたはずの未来を失うことになるだろう。

——二つに一つだった。

第13話 新結社（後書き）

『羽間』の話を少し掘り下げてみました。
詳しくは機会があれば

第14話 始まりの物語の終わり

答えも結果も二つに一つだった。

これに了承すれば『羽間』の家格を少しでも取り戻すことが出来るだろうし、しなければそのまま没落したままの未来が待っている。このように言えば了承すべきだ、と思うかもしれないがそんな簡単な話ではない。

刻季が高校生だから務まらないというのももちろんあるが、それは華音や音弥に協力してもらえばなんとかなると割り切って。

それ以上の問題とは『羽間』が要職に就くのを師団が許すか、ということである。

音弥の話が本当かはまだ確信の持ちようがないがもし本当ならば、今後の師団の家の当主候補があつまる結社ということである。

まあ音弥と華音が所属する時点で嘘になりにくい話ではあるが……。

現在ではないとはいえ未来の日本魔術界を担う一手に値する師団・旅団の家の継子で結成される結社の頭首になるなど、裏切り者との認識が晴れているはずのない羽間がやることは警戒されるに決まっている。

刻季自身は『羽間』の名前で革命を起こそうだなんて思ったこともないし、権力なんて高校生である刻季に必要なはずがないので求めたことも無い。

必要以上に目立つことは良しとしなかったし、華音のことも黙認はしているが正式に認めた覚えは無い。

つまり権力を持ったところでそれを無理に行使しようだなんて考えてない。

求めているのは不遇である『羽間』の家に生まれた姉のようになるように『羽間』の家格の最低限の復活である。

いやもちろん、姉だけでなく、両親に祖父母もその対象なのだが、現状では姉の為の家格回復が第一のモットーであるといえるだろう。

それゆえに刻季自身に辞退する気持ちがあるといえ、面倒事が増えて面倒くさそうだ、ということしかないのだが、師団の反対があれば話は変わってくる。

認められずに、結成すら出鼻をくじかれて終わるのではないかと、いった疑問が消えることなく刻季の頭を駆け巡るのだ。

要約すると、刻季自身はそこまでやることに否定的ではないが、他の連中は知りません。

といったところだ。

そんなことをいつまでも思っていて話が始まらないし進まない、良い方にも悪い方にも。

堂々巡りする頭を切り替えて一番に障害となるだろう話から切り出した。

「僕は今、やることはやぶさかではありません」

華音がその言葉に目を輝かせる。

「ですが僕自身が良くても否定的な方々もいっぱいいるでしょう。

例えば――」

「師団、とか？」

刻季の声を切って割る音弥。それは刻季の内心を見据えていようものだった。

少し動揺するが、音弥ならそこまでやってもおかしくないと多少なりとも思っている自分がいたので話を続けた。

音弥にしてみれば失礼な話だが

「ええ、そうです。それに師団だけでなく旅団も……。たとえば僕以外のどんな一般人がやっても反対されるでしょうが、僕ならなおさ

らです。結成すらままならない状態になるのではないですか？」

刻季を今縛っているもの、それは単純であり複雑なものだ。相手を断定できる分単純だ、しかしそれからは避けて通れない分かなり複雑だ。

師団・旅団それに多分、宗教徒も。

そう言えば単純だが、それが敵だとわかっていて分単純だが、これらから防ぐことはかなりの難題でかなりの力が必要とする。まず一介の高校生に出し抜くことは100%不可能といえよう。

しかしそんな刻季の当然の想いも一言で覆される。

「大丈夫」

そう発した音弥はさながらこれから魔王を倒しに行く勇者のような頼りになる表情をしていた。

「……大丈夫って何が大丈夫なんですか？」

だが音弥の頼りになる表情を見たところでそう簡単に意見を変えられるわけではない。

「だから大丈夫なんだって。羽間君はトップとしてデンと構えててくれるだけで、さ」

「そんな根本的な解決なんて何もしてないじゃないですか」

「根本的な解決なんて最初から出来ると思ってないから」

「えっ……？」

「別に根本的な解決を結社^{なかま}として求めているわけじゃないんだ。もともと上に認められると思ってもないし、そんなこと見込んでいるわけでもない。僕たちが作るのは――」

――秘密結社だ

音弥の声に部屋が静寂に包まれる。

音弥としては刻季の反応を求めていたのだろうが、驚いて声を出すことが出来ない。

「……………」

「ははっ、そんなに驚いてどうしたの？」

元の飄々とした態度に戻して音弥が訊いた。

「元々結社を作るとして、国に申請書をだして……なんてことは必要なのはわかってるでしょ？ そうなるとただ結成表明するしかないかの違いじゃないか。表明しなければ秘密結社ってことになるのは当然」

「……………」

「……ま、秘密結社だとしても親父たちにはれるのは時間の問題。いや、もうばれてるかも……」

「ダメじゃないですか!？」

ずるっと漫画のようにこける刻季。

「でも、うちの親父は強く言えないはずだよ」

「何故ですか？」

「僕に勝ったからね。魔術も使わずにさ」

「……すいません」

思わず謝ってしまう刻季。

「いや別に、いいよ。使えない事情もあるんだろうし」

「そうです。刻季様は全く悪くありません」

刻季の事情を知っている華音が刻季を庇う。

「ま、そういうことだから親父からは当分大丈夫だろう。その間に

地盤を固めて……」

「あの……ッ」

「ん？」

「なんか入ること勝手に決められてませんか？」

「え、っ！？ 違うの？」

なんか変な声を出す音弥。喉の奥から出ているような声だ。

「いえ、違いますけど……。でも最後にひとつだけ」

「ふう……。なにかな？」

安心したように息をつく音弥。

「結成する目的はなんですか？」

一番大事なことを完璧に訊き忘れていた。

「あつ……。話してなかったっけ？」

頷くと音弥は言葉をつづけた。

「いくつかあるけど、第一の大きな目的は魔術師の権威の向上。結局国の下で統制されているただの魔術師の意見はそこまで反映されないからね。二つめは宗教徒との均衡を整えるため。最近教徒の力が凄いからね、そのバランスを調節したい。魔術師勢力を教徒サイドより大きく出来たら言うことなしか。それで三つめは……。これは目標というよりも願望に近いんだけど、現在の魔術体制を崩すこと。師団の下に全ての魔術師がいるという状態をなんとかしたい。全ての平民魔術師の発言権をもっと大きく、より豊かにしたいんだ。あとは個人個人であるんでしょ。それは上の目的とともに解決すればいいよ。とりあえず結成の目的は以上三つ」

一気に言った音弥の目的と願望はあまりにも難題だった。生きているうちに変えられるようなものではない。

「一つめはわかります。二つめも……。まあ、わかります。でも三つ

めは……」

「だから目的じゃなくて願望なんだよ。そう簡単に出来ることじゃない。日本魔術界を根本から変革するわけだからね」

「秘密結社にそこまで出来るのでしょうか？」

「わからない……、だからいずれは表明するつもりだよ」

「師団の家の若い人たちもそれを納得しているのでしょうか？」

「半々……ってとかな」

内部にも反対勢力はあるらしい。

「僕も今の状態を崩さない方がいいと思います」

刻季が反対の意思を表す。

「どうして？」

「今の状態に満足している人も多いからです。もちろん『羽間』の意見ではありませんが……。現状を崩してその時に教徒との争いがあつたら、魔術師は一気に瓦解してしまいます」

「うーん、確かにそうなんだけどね。ちなみに『羽間』としての意見だとどうなるの？」

「お兄さんの話はとても魅力的だと思います。『羽間』にとつてこれほどの報酬は無いでしょう。でも『羽間』だけで喜んでいてはいけない話だと思います。『羽間』が良ければそれでいいなんて話になつたら、より『羽間』は恨まれてしまいますから」

微笑む刻季。しかしそれは苦笑しているようにしか見えなかった。

「ま、話は結成してから何回でも出来るよ。それじゃ羽間君はOKということでもいいのかな？」

「……こちらから要求があります」

「僕達にできることならなんでも聞くよ」

律儀にも華音も含める音弥。

それはいらぬお世話だったが。

「まず一つめは2人ほど結成メンバー枠を開けたい欲しいんです」
「2人？ 別に制限人数なんていないけど、入れたい人でもいるの？」

「はい「女性ですか？」……え？」

華音が抱きつく力を強めて食い気味で訊いた。
どこか非難する様な目で

「まあ一応女性だけど、萌葱と姉さんだよ？」

「刻季様はお姉様がいらっしやったのですか？」

「うん、まあね」

「そうですか、それでは是非今度挨拶をしに行かせていただきます。
ご両親にももちろん」

「いや、それは……」

「空いてる日取りを教えてください」

「えっ……ちよつと……」

教えるわけにいかない。華音に紹介させたらまたとんでもないことを言うに決まっている。

それに姉には然るときに然る説明を刻季自身がしなければ……。

華音と姉を混ぜたらどんな化学反応するか想像もしたくなかった。

こんな表現したくもないが劇薬同士を混ぜるようなものだ。

ヘタしたら死人がでる……。

それでも姉を結社に含めることは刻季の中で絶対に必要なことだった。

「……それじゃ、今度ね」

とりあえず言葉を濁して逃げようと図る刻季。

「はい、ありがとうございます我が君。約束です。絶対忘れません」
「……………」

しかし逃げ道をふさがれてしまった。

華音が抱きつく腕を緩める。

華音は華音で少しアレな人なのだが、姉は姉でアレなのだ。

刻季は姉に後で連絡し、華音を個人的に紹介することに決めた。

「萌葱さんってさっきの子だね？ それなら勿論大丈夫。まだ誘ってはないけれど、頭数には入っているから。それで羽間君のお姉さんは強い人なのかな？」

「ええ、その点に関しては問題ないと思います」

「なら、いいよ。というより頭首の要望は出来る限り応えたいところだから」

「ありがとうございます」

頭を下げる刻季。

頭首というのはまだなっていないが、聞き流した。

刻季の意味も固まってきている。

「それから最後にもう一つだけ」

「ん？」

「僕は戦いますが、その時に魔術を使わないことを容認してもらうのと、それを結成メンバーに伝えてください」

一応魔術を使えないでなく使わないと言っておく。

「別にいいけど、どうして使わないの？ 戦う上で魔術は必要ないとじゃないの？」

「……兄上。我が君、刻季様は事情があって魔術は使えないんです。ですが誰よりも強く、そして誰よりも美しく勝つことが出来るお方です。なので、あまり詮索の程は……」

「……うーん、わかったよ。でも戦争がある場合は第一線で戦ってもらっから」

華音があつさりと刻季の魔術が使えないことをばらすが、それよりも……

「……戦争？」

「当たり前でしょ。最低でも教徒と、最悪師団とも決別するかもしれないから。もともと師団から独立している結社なんて魔術界の異端も同然の扱いだからね」

刻季が疑問を呈すると音弥が説明し、華音も当然のことのようにキョトンとしていた。

現在日本魔術界の結社は、殆ど師団の管理下に置かれている。

例外は、国家の下にある結社と、秘密結社のみだ。

だから必然的に結成表明すれば師団の許可ありきの結社と思われる。しかし、今回の結社は違う。

秘密結社として活動し、結成表明を掲げたとしてもその時は完全に師団と決別していることだろう。

それも師団の家の者がだ。

もし結社の力が強くなれば、師団の敵として扱われるだろうし、そうなれば処分くちくの対象になるだろう。

今は刻季と音弥の戦いのことで黙認するかもしれないが、それがずっと続くとは考え難い。

やはり姉を含めるべきでは無かったかもしれないと思い始めてくる。とりあえず、話すだけ話してみようと考えていると、華音が刻季の不安を感じ取ったのか、

「刻季様？ どうなさったんですか？」

「いや、姉を誘うかどうか考えていたんだ。自分のことならまだしも、戦うことは覚悟していたけど、戦争って言葉に少し怖気づいち

「やっ たみたい」

情けなく、ははと刻季が笑うと華音がまた抱きつく腕を強めて言った。

「大丈夫ですよ。刻季様とならお姉様も喜んで戦うと思われます。私がそうなのですから」

久しぶりに微笑んで意思を伝えてくる華音。

不覚にもその表情は何度見ても、愛らしく愛おしいモノで刻季は照れてしまう。

「ですから、お誘いなさるだけなさってみてはいいですか？ 私もお姉様に会いたいですし」

「そうだよ。誘ってみるだけ誘ってみなよ」
音弥が追撃してくる。

「そうですね。誘うだけ誘ってみることにします。ただ止められたらどうしょ……」

「それは確かに有り得るね……」

「そうですね……」

華音と音弥も刻季と同じく苦渋を浮かべる。

.....

何故誘って仲間になることが断られることしか考えなかったのかわからないが、現状最悪な結果としては刻季を引きとめることだろう。最悪の結果であって、一番有り得る結果だ。
個々人で考えをやめないの

沈黙が横たわる談話室。

そこに天原父との挨拶をようやくと終えたのか、萌葱が入ってきた。

入ってくるなり怪訝な顔をした萌葱が一言。

「……なにこのお通夜ムード？」

萌葱の疑問も当然のことだろう。

萌葱としては誰かと指定してかけた質問ではなかった。

しかし皆は思考を止めずにいたので、萌葱の問いに返す者は一人もいなかった。

「えっ？　なんで無視するの？　ねえ……」

尻すばみになっていく声で余計聞こえにくくなっている。

だからというわけではないが刻季たちはまるで萌葱の声を聞いていない。

皆して、うーんと唸っている。

そろそろ堪忍袋の切れる音が聞こえてくるぞ、刻季！

もちろんこんな人為的な呼びかけをしても届くはずがない。

萌葱が寂しさと怒りー（1：9）でぶるぶると震え始める。

限界値がかなり低い萌葱はあまり我慢することなく怒りを発する。

「刻季っ！」

「うわっ……って萌葱？　いつの間に来たの？」

無神経に刻季が返すと萌葱は瞬間ヒーターの如く加熱に過熱を重ね、刻季にのみ怒りを向けた。

「あんだねえ。あたしが何回も問いかけてるのになんで無視するのよ？」

「え……？　ああごめん気付かなかったよ。ちょっと考え事しててね」

「ふーん、考え事ねえ。一体何をかんがえていたのかしら？」
刻季視点から見ると萌葱はいきなり怒りゲージMAXの状態で刻季の前に仁王立ちしている。

「そんでなんで会長とあんたは腕を組んでるのかしら？ 言い訳があるなら聞くだけ聞いてあげる」

ゆらゆらと髪が蠢いているような幻覚を見ているのか、と刻季は目を疑った……が、単純に怒りのオーラに充てられて萌葱が魔術を使っているだけだった。

「い、いや……、エート……」

さつきまで平和に考え事をしていられたのに、突然サファリパークに放たれたような威圧感を感じなければいけない自分の不運を呪った。

「ま、どんな言い訳でも意味は無いけど」

美人の怒り顔はすさまじく怖くて、どこでもいいから逃げたくなる。というか逃がしてやれ。

そこでそんな刻季を救う一人の少女がいた。

怒りが振り切っている状態の萌葱を諷める声がかかる。

「南雲さん、ダメですよ」

それはやはり華音の一言だった。

「今の状況はよくわかりませんが、刻季様に危害を加える可能性があることだけは察します」

相変わらずボケボケな華音の言葉だったが一応聞いた途端に怒りの視線は収まりつつあった。

「会長……」

「私もすみませんでした。何か私のやったことで南雲さんが嫌な気

持ちになったなら謝らせてください」

「いえ、会長は何も……」

こんな純粋な生徒会長に対して、怒りの半分はあんたのせいよ、なんて言えるわけがなかった萌葱なので、図らずも軍配は華音に上がった。

しかもいまだに腕を組みながら。

毒気を抜かれる形となった萌葱はため息を一度突き刻季の手元にある腕掛けに腰を何故か降ろしてもう一度疑問を投げかけた。

そこで解放されたように萌葱よりも大きくため息をつき、萌葱に先程からの話を説明した。

「ふーん、結社ね。それであたしも。そして刻季あのみとの姉も。ふーん」

刻季を見下ろす形になっている萌葱は説明を聞き終えると、嬉しそうな表情と複雑そうな表情の二つを器用にも交互に浮かべて感想をもらった。

ちなみに見下ろしている姿に華音は、あまり我が主に不敬を働かないでほしい、と内心思っていた。

「なんであたしも誘ったの、刻季？」

嬉しそうに刻季を見下ろして訊いた。

「いや、なんでって……。もともと師団の家の人たちって話だったし……」

「それでも決定的に誘うことにしたのはあんたでしょ？」

「まあ……そうだけど」

「それはなんでなの？」

表情を変えずに何度も問いかける。

実は刻季が鈍いだけなのだが、萌葱は刻季から誘われたことが嬉しいのだ。

まあ鈍いから気付かない鈍感男って言うのは大変だろう。

「うーん、っていうか萌葱がいないことが考えられないからなあ、理由なんてないよ」

「えっ!？」

一瞬でより幸せそうな笑顔に萌葱はなった。

その反面華音は何故か不機嫌そうな様子だが。

理由なんてない、とは言っているが、それが理由ってことにその場にいる刻季だけが気づいていなかった。

「そうか、そうか。あたしがいないのは考えられないか!」

さっきの怒りはどこへいったのやら、と刻季は不思議そうに萌葱を見ていた。

目に見えて嬉しそうな萌葱が結社に入ることがたぶん決定した。これで拒否する人間はあまりいないだろう。

ともあれ、これで現在残っている憂いは姉を誘うことだけになった。それはもうすでに刻季の中で、誘ってみなきゃ始まらない、といった考えが纏まつてきたので後は誘うことを実行するだけだ。

刻季の考えが纏まったのがわかったと、

「それじゃ、これからよろしく、頭首さま」

音弥がおどけて言うのと華音が続いて

「よろしくお願い致します、我が君」

刻季の腕を離して、席から立ち、兄妹で刻季を歓迎した。

2人は対照的なようすだったが、どこか似ている雰囲気があった。

「えーと、とりあえず。よろしく願います」

頭をポリポリ掻きながら刻季も返事をする。

「あたしもよろしくおねがいします」

萌葱もそれに倣って言った。

――××92年4月12日天原邸宅。

ここから結社の結成が始まった。

ここは天原邸と打って変わって、純洋風な邸宅だった。

その部屋には、剣から始まり、槍、爪、戟など、大小様々な武器が立てかけられていたり、飾られていたりした。

その武器を見るだけで、この世界の人は『宗教徒』とわかる。

現在武器の所有・使用許可が出ているのは、宗教徒と国家役員のみになる。

国家役員はこんな豪勢な部屋に住まうことは許されていないことから、消去法でいくとここは宗教徒の家ということだ。

その家の王家の謁見の間さながらの部屋には人が集まっていた。

「陛下、12師団とは何時開戦するのですか？」
トエルフス

「まだ時期ではない。今戦えば彼奴らには負けてしまうだろう。負けなくても引き分け程度にしか納まらん。力を溜める時だと思え」

「はっ！」「はっ！」

陛下と呼ばれたその男は、部下を諫めるように言つと憂いを浮かべた。

魔術師と宗教徒の險悪さは過去からのモノでそう簡単に取り除けるモノではない。

結局はどちらかが、勝つか負けなければ消えることは無い。

いや結果がどうであれ遺恨は消えることなく残るだろう。

それこそ何十年も何百年も何千年も……

今現在は国家が力を持っているため抑えは聞いているものの、パワーバランスが崩れたら、その瞬間争いが再発するだろう。

男はその瞬間を虎視眈々と狙っていた。

第14話 始まりの物語の終わり（後書き）

ようやく話が纏まってきたかな、と思います。

ここまで読んでくれた皆さんありがとうございます。
序章が終わったと云ったところでしょうか。

これからはがんばって書くので応援してくれたら感謝の限りです。

今回長かった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863w/>

魔力世界の時操者

2011年10月20日03時10分発行